公益財団法人
国際文化フォーラム 編

〈対話〉をつくるインタビュー

「ときめき取材記」プロジェクト報告書

2023年増補版

公益財団法人
国際文化フォーラム
TJF

公益財団法人
国際文化フォーラム 編

〈対話〉をつくるインタビュー

「ときめき取材記」プロジェクト報告書

2023年増補版

公益財団法人
国際文化フォーラム
TJF

はじめに

本報告書は、公益財団法人国際文化フォーラム（TJF）が大学等の先生方と連携して2016年度から実施している「ときめき取材記」プロジェクトの実践例と、実践の中から見えてきた本プロジェクトの意義や課題をまとめたものです。2016年度に1校から始まった本プロジェクトですが、2021年2月までに延べ30校が取り組みました。この報告書には初期に本プロジェクトに取り組んでくださった国内外の大学や日本語学校の先生方の2017年度の実践2例、2019年度の実践4例、そして本増補版に、新たに実践2例を収めました。

インタビュー活動を核にする「ときめき取材記」プロジェクトは、学生の疑問や〈知りたい思い〉から始まります。知りたいことをテーマとして挙げ、そのテーマに関係している人を探し、その人にインタビューし、原稿にまとめ、ウェブサイト「ときめき取材記」に掲載するところまでが一連の活動です。ウェブサイトに掲載されている記事は110本を超えました（2023年4月現在）。

原稿掲載までには、多くの山があり、山を乗り越える過程で、交渉や調整、協働など、学生はさまざまなことを体験します。なかでも、インタビュイーと向き合い真剣にかわすやりとりは、学生たちに大きなインパクトを与えます。自分とは異なる考えや思いを聞き、それまで知らなかった世界を知り、人の生き方そのものを受け止める学生が多くいます。これは〈対話〉が起こったからこそ得られるものであり、このプロジェクトの大きな醍醐味です。

「ときめき取材記」プロジェクトは、多くの方々の協力を得て、ここまで続けることができました。参加教師の勉強会や実践ワークショップで、聞き書きのお話をしてくださった塩野米松氏、写真に関する講義をしてくださったミック・パーク氏と中西祐介氏、「外国語学習のめやす」の講義をしてくださった田中祐輔青山学院大学准教授、プロジェクト誕生のきっかけをつくってくださった横田雅弘明治大学教授に心よりお礼を申し上げます。

そして、学生が〈生きた学び〉を手にすることができたのは、「学生のために」とインタビューを引き受けてくださった方々のお陰です。この場を借りて深く感謝申し上げます。

この報告書が今後、同じような取り組みをしたいと考えている方々の参考になることを心から願っております。

公益財団法人国際文化フォーラム

目次

はじめに　iii

「ときめき取材記」プロジェクトとは？　01

第1部「ときめき取材記」プロジェクトの意義

「ときめき取材記」プロジェクトの特徴と取り組むことの意義
①三代純平　06
②矢部まゆみ　09
③義永美央子　12
④荻野雅由　14

第2部「ときめき取材記」プロジェクトの実践

「ときめき取材記」プロジェクトの流れ　18

実践例
①武蔵野美術大学　三代純平　21
②横浜国立大学　矢部まゆみ　29
③OLJランゲージアカデミー　重信三和子　38
④カンタベリー大学　荻野雅由　45
⑤大阪大学　義永美央子　50
⑥東京国際大学・群馬県立女子大学　上田安希子　57
⑦秋田大学　濵田典子　66
⑧法政大学　村田晶子　73

おわりに　80
増補版あとがき　81
資料　82

「ときめき取材記」プロジェクトとは？
――誕生の経緯と「めざすもの」

1. 一人ひとりの語りに耳を傾ける

「日本文化」を語るのではなく、一人ひとりにフォーカスしよう――2012年、私たちTJFは、ウェブサイト「くりっくにっぽん」を、そんな発想から開設しました。海外の日本語教師に向けて発行していた情報誌『Takarabako』『ひだまり』が、2011年に休刊した後のことです。

メインコーナーである「My Way Your Way」では、日本で話題になっていることをテーマとして取り上げ、そのテーマに「はまっている人」にインタビューします。「なぜそのテーマにはまったのか？」「はまる前と後では何が変わったのか？」について聞くことで「人の内面に迫りたい」と考えました。

人は誰もが物語を持っています。なぜその物語を紡ぐのか。どんな出会いがあり、どんなできごとに遭遇したのか。何を感じ、どうやって生きているのか……テーマにひきつけながら、一人ひとりの語りに耳を傾けることで、「人」から切り離されることなく、多様な「文化」が浮かび上がってくると思ったのです。

また、テーマを多角的に見て、テーマに関わるさまざまな人を紹介することで、その背景に「日本」がぼんやりと浮かび上がり、枠にはまった「日本」ではなく、変化を続ける「日本」を伝えられます。そして読者には、日本という「窓」を通して、より広い世界や多くの人たちと出会ってほしいと願っていました。

2. インタビューを通して変わる学生たち

そうした「日本情報の発信」に取り組む中で、明治大学国際日本学部・横田雅弘教授のゼミの活動にご協力する機会がありました。2年生ゼミの「新しい日本を発見し発信する」プロジェクトです。1年間のゼミの最終ゴールを「My Way Your Way」のコンテンツをつくることとし、学生たちは、それに向けて紹介したい「日本」を文章と写真でまとめたり、2人1組で相手を紹介するインタビュー記事を作ったり、といった課題に取り組んでいました。

そして学生たちは、夏休みに「自分が興味のある仕事をしている人にじっくり話を聞き、聞き書きスタイル（インタビュイーの方が語っているように一人称でまとめる）で原稿にまとめる」という課題に取り組みました。夏休みが明け、和紙職人、美容師、バリスタ、介護士、青果店など、さまざまな職業の人たちに聞いた話と原稿を携えて教室にやってきた学生たちの顔は輝いていました。1人の人に話をじっくり聞いたことのインパクトは、私たちの予想をはるかに超えていたのです。

ある学生は「簡単で単純な仕事だと思っていたのに、聞いてみると奥が深く繊

細でもあった」と語り、ある学生は「ものすごくかっこよくて自分も同じ仕事がしたくなった」と語りました。涙を流しながら語る学生もいました。それまでほとんど発言しなかった学生も、自分が聞いた人の仕事がどんなに大変なのか、どれだけ誇りをもってやっているのかを熱く語りました。どの学生も、インタビュイーの仕事に対する姿勢から、その人の人格と人生を感じ取っていました。また、真摯に対話し、原稿にまとめたことで自信も得たようでした。

そして1年間の仕上げとして、「My Way Your Way」のコンテンツづくりのために改めてテーマを決め、人を探し、インタビューを行い、原稿にまとめました。このときに作成された記事6本は「くりっくにっぽん」に掲載されています（テーマ「アイドルは好きですか？」と「「デコ」で気持ちを伝える」各3本）。

ある学生は、インタビュイーに送ったメールに、こう書いていました。「私たちが責任をもって、いい記事に仕上げたいと思います」。しっかりと向き合う中でインタビュイーの人生の重みを感じたことが、このことばにつながったのでしょう。同時に、自分が作成した記事が広く公開されているウェブサイトに掲載されることも、大きな責任感を生んだのだと思います。

学生たちは、興味のあるテーマについて考えるときに社会を見つめ直し、一つのテーマに関わる人たちを選ぶときにそのテーマを多面的に見ることになります。そして、インタビューする中で1人の中にもさまざまな文化があることに気づきます。学生たちから、授業を終えて「自分のなかの「日本」が広がった」「そうではないと思っていたが、自分の中のステレオタイプに気づいた」といったことばが上がりました。自ら企画、インタビューし記事にまとめたことで起こった変化です。

3.「ときめき取材記」プロジェクトの誕生

私たちが「一連のプロセスを若い人たちに体験してもらう場をつくりたい」と考えていたときに、長年インタビュー活動を授業に取り入れている武蔵野美術大学の三代純平准教授とお話する機会がありました。「学生がインタビューしまとめた原稿は冊子にしたり、クラスのホームページに上げたりしているが、一問一答で簡単に済ませてしまったり、最後の原稿のまとめで力を抜いてしまったりする学生もいる。より学びを深めるために方策を探っている」とのことでした。

そこで、前述した明治大学の取り組みを参考にしながら、インタビュープロジェクトを連携して進めることになったのです（実践例①参照）。TJFは、2016年夏に、学生たちの記事を発信するウェブサイトをつくり、「ときめき取材記」と名づけました。加えて、企画から記事の作成・発信までの一連の活動を「ときめき取材記」プロジェクトとしました。

4.「ときめき取材記」プロジェクトの発展

2016年度の成果をふまえ、より多くの先生方に実践してもらいたいと考えました。そこで2017年度は、実践のプロセスを可視化するために、私たちが提案している「外国語学習のめやす」のフレームワークを使うこととし、すでに取り組んだことのある先生、取り組みたいと思っている先生方を対象にワークショップを計3回実施しました（このときに作成したカリキュラムやルーブリックは「めやすWeb」に掲載されています。https://www.tjf.or.jp/meyasu/support/）。

さらに、ファイルやメッセージなどを共有できるアプリでグループをつくり、授業計画や評価ルーブリック、実践レポートなどを共有しました。新たな実践者は、グループに加わり、共有されている資料などを活用するほか、意見交換、先行実践者からのアドバイスなども参考にプロジェクトを進めました。これは、現在も継続されています。

こうして2017年度には、武蔵野美術大学に加え、大阪大学、OLJランゲージアカデミー、群馬県立女子大学、東京国際大学、ニュージーランド・カンタベリー大学、横浜国立大学の日本語や日本事情の授業で実施されました。その後、2018年度には、実践した先生方を対象にそれぞれの成果と課題をもちより情報交換し、2019年度には新たに取り組みを希望する先生方も対象に、プロジェクトの肝であるインタビューと写真についての勉強会を実施しました。そして2020年度までに、上記の機関に加え、愛知県立大学、秋田大学、法政大学などでも、ときめきプロジェクトに取り組みました。

5. このプロジェクトのねらい

インタビューは単なるQ&Aではありません。真剣にインタビュイーに向き合い、質問を投げかけ、答えをもらい、さらに答えから質問をつくって話を発展させていくことは〈対話〉そのものです。日常生活では交わすことのない話題に踏み込んで聞くことでもあり、双方にとって自分を見つめ直す機会にもなります。インタビュアーにとっては、自分が思い込んでいる「文化」を崩し、「文化」を新しい視点で捉えることにもつながるのです。

インタビュイーの語りに耳を傾け、語りを引き出していき、真剣に向き合うことで、その人の立場になってみることができます。文字起こしをし、原稿にまとめていくときに、インタビュイーへの理解はより深まります。インタビュイーの物語を知ることで、これから出会う人たちにそれぞれの物語があることを想像できるようになるのではないでしょうか。そしてこの体験は、さまざまなバックグラウンドの人たちと共に暮らす社会で必要な力につながると考えます。

一方、ウェブサイトには多様なバックグラウンドの学生たちによる、多様なバックグラウンドの方たちへのインタビュー記事が集積されています。ウェブサイ

トを訪れる人にとっても、多様な人々との出会いがあり、新たな世界への入り口となりうると思っています。

6. この報告書について

プロジェクトが実践されている現場の状況は、共修のクラス、留学生のクラス、海外のクラスなど、対象者も授業内容もめざすものも異なります。この報告書では、さまざまな状況でどんな点に意義を見出しているのかを第1部で明らかにし、第2部では各実践における授業の流れや成果・課題を紹介します。

また、巻末には実践者間でシェアしている資料の一部を掲載しています。

第1部

「ときめき取材記」プロジェクトの意義

「ときめき取材記」プロジェクトの特徴と取り組むことの意義①

三代純平

1. インタビューという経験

「ときめき取材記」プロジェクト（以下、ときめきプロジェクト）は、インタビューを中心としたプロジェクト型の学習です。

そもそもインタビューとは、どのようなものでしょうか。これは、簡単なようで、意外と難しい問いです。インタビューには、インタビュアー（聞き手）とインタビュイー（語り手）がいます。当然ですが、語り手は聞き手の質問に答えます。重要なのは、聞き手がどのような質問をするか、にインタビューが大きく左右される、ということです。インタビューは、聞き手と語り手の対話によって作られていきます（三代2015）。それは、聞き手が、語り手と共に物語を紡いでいくための対話です。

対話とは、他者とのコミュニケーションから共有できる価値観や新しい意味を生み出していく行為です。インタビューは、対話の一つの形であり、語り手の過去の経験を、いま・ここで語り手と聞き手が再構成しながら、新しい意味を作り出していく行為だといえます。

近年、教育の世界では、この対話の意義が注目されています（秋田2014）。グローバル化が進んだ社会では、異なる文化を受け入れ、共に協力し、対話を通じて新しい意味を生み出していくことが必須となっているからです。従来の教育には、この「対話の経験」が不足していました。しかし、インタビュイーの過去の経験に学びながら共に新しい物語を創造するインタビューという活動は、学生たちに意義のある対話の経験を与えてくれます。

2. なぜときめきプロジェクトに取り組むのか

インタビューとは、語り手と聞き手が共に物語を紡ぐ行為です。そして、その対話の経験こそが、ことばと文化の教育において重要であると考えられます。

私がときめきプロジェクトに取り組むのは、インタビューという対話の経験をより深い学びにするための工夫と装置が充実しているからです。まず、記事を公開するメディアとしてTJFのウェブサイトがあります。実際に「ときめき取材記」に取り組んで実感することは、公開する媒体があることの意味の大きさです。クラス内で共有する記事とは意味合いが大きく変わってきます。社会に向けて公表されることで、記事の持つ責任、それに伴う記事に対する学生の責任感が重くなります。学生たちは、語り手であるインタビュイーのことばと向き合い、

それを読むであろう読者や社会と向き合うことが求められます。

次に、ウェブサイトに記事が集約されていくので、過去の記事にアクセスすることができます。過去の記事を読むことで、学習コミュニティの経験を引き継ぐことができることもこのプロジェクトの持つ強みです。学生は、過去の記事からインタビューの仕方や記事の書き方を学びながら、プロジェクトに臨みます。教師も、過去の記事を教材にして、インタビュー記事のまとめ方や記事用の写真の撮り方などを講義することができます。ときめきプロジェクトでは、こうした「縦のつながり」も学びを深めることに寄与しています。

さらに、ときめきプロジェクトは「横のつながり」も作り出しています。大学など複数の教育機関がプロジェクトに参加していますが、担当教員は、TJF主催の研修会に参加するなど、横につながり、各機関の取り組みを相互に参照しながら、自身の実践をよりよいものにしていくことができます。

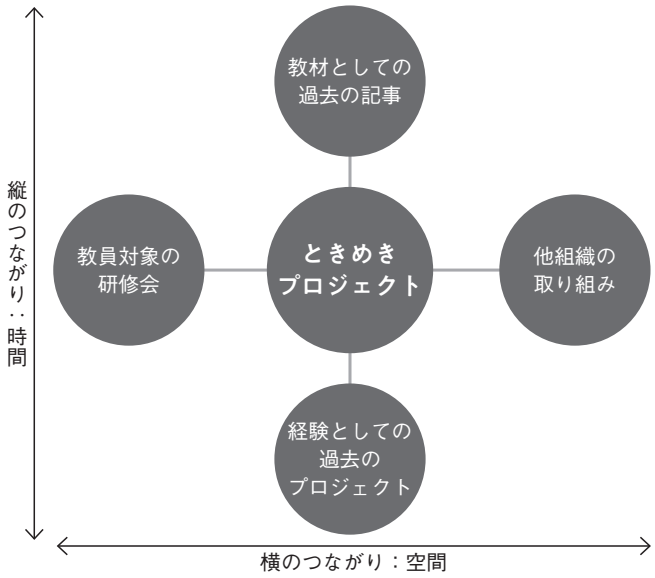

図1　ときめきプロジェクトを支える「つながり」

3.「ときめき取材記」に参加した学生の学び

では、実際にプロジェクトに参加した学生たちは、インタビューを行い、記事を書く過程で何を学んでいるのでしょうか。【ことば】【文化】【キャリア】という三つの観点から捉えることができます。以下にそれぞれの観点からの期待される学びを挙げてみます。

【ことば】
・クラスメートとの議論を通じた日本語によるディスカッション力
・企画やインタビューの報告などを発表することによるプレゼンテーション力
・記事の執筆を通じた相手に伝えるための文章表現

【文化】
・多文化を背景に持つ学生たちのグループワークによる異文化への気づき
・インタビューを通じて「個」を理解することを通じた「個」の持つ多様性へ気づき
・記事の公表による、文化を伝える／つくる「文化の担い手」としての自覚

【キャリア】
・協働作業を通じたチームに貢献するコミュニケーション
・アポイントをとるためのメールの書き方
・インタビューにおける待遇表現
・インタビューを通じたロールモデルの発見

以上のように、ときめきプロジェクトは、多様な角度からその学びを捉えることができる、総合的な学習となっています。私の担当する実践の場合、留学生と日本人学生の共修クラスで、グループによるインタビューに取り組んでいるため、グループ活動による学び、準備を含めたインタビューを通じた学び、記事をまとめることを通じた学びがあります。総合的に高度なコミュニケーションと多様な文化の有り様を、経験的に深く学ぶことができます。そして、これらの学びは、学生たちのキャリア形成にもつながります。特に、尊敬すべき大人との深い対話の経験、その経験を自らの視点で物語化するという作業は、人の生き方を学び、自分の生き方を見つめることです。学生たちは、こうした「経験による学び」を、最も評価してくれています。

参考文献　秋田喜代美編（2014）『対話が生まれる教室―居場所感と夢中を保障する授業』教育開発研究所
三代純平編（2015）『日本語教育学としてのライフストーリー―語りを聞き、書くということ』くろしお出版

「ときめき取材記」プロジェクトの特徴と取り組むことの意義②

矢部まゆみ

私は、2013年より留学生を対象とした大学の授業で地域の方々へのインタビューを組み込んだ活動を行ってきましたが、このインタビューをもっと対話的に深みのあるものにしたい、という課題を抱えていました。そこで、2017年から「ときめき取材記」プロジェクト（以下ときめきプロジェクト）を軸に授業を再構築しました。その中で得られた知見をもとに、このプロジェクトの意義をまとめてみたいと思います。本報告書の実践例②の「◆成果」と連動していますので、あわせてお読みください。

1.「訊くこと」と「聴くこと」からの対話の深まり

ときめきプロジェクトでは「その人が取り組んでいることの意味や魅力が伝わるような記事を書く」ことを目標に据えたインタビューを行います。その中で、学生たちは、「訊く」（質問する、たずねる、問う）と「聴く」（相手の話に耳を傾ける、受け止める、理解する）の2種類の「きく」という行為にじっくり取り組むことを経験します。

（1）「訊く」（質問する、たずねる、問う）

①自分が関心のあるテーマ、自分が話を聴きたい相手を選び、どうしてその人にインタビューをしたいのかを明確にした上で、何を尋ねたいか、どのように尋ねたらよいか検討し質問を準備する。

②その人の考え方、その人が大切にしていることなどを、話してもらえるように質問する。

③自分の質問に対して相手からでてきたことばをもとに、次の質問をつくる。

（2）「聴く」（相手の話に耳を傾ける、受け止める、理解する）

①自分の質問に対して相手が答えてくれたことに、丁寧に耳を傾ける。

②相手の話を理解しようとする。

③興味や共感を示しながら、相手の話を引き出す。

④インタビューを録音したものを、インタビュー後に再度聴き、文字に書き起こす。その作業の中で、インタビューの場では聞き落としていたことばや、理解ができていなかったことばも拾い、相手が言おうとしていたことをより正確に捉える。

⑤書き起こした内容をもとに、記事としてどのように構成するか検討する作業の中で、相手が言おうとしていたことの意味、そして自分が相手からその話を聴いたことの意味を改めて考察する。

この「訊く」と「聴く」が、深い対話を実現する鍵となります。「対話」についてはさまざまな論考が重ねられていますが、それらの論考から示唆を得て[1]、私自身は、「対話」とは、人と人とが出会い、向き合い、互いの〈声〉を聴き、向き合い、共感したり視点の違いを認識したりしながら、自分自身の存在（自分と関わりのあるものごと、自分を取り巻く世界を含め）の意味付けをしたり、新たな意味を創り出していく営みである、と捉えています[2]。インタビューをして記事にまとめる活動の中で、「訊く・聴く」を丁寧に積み重ねることにより、相手への理解が深まり、またそこから気づきが生まれ、思考の広がりや、新たな価値が発見・創造につながっていくと実感しました。

2. 地域とのかかわり：地域と出会う、 知る、 理解する、 つながる、つなぐ、 新しい意味や価値を生み出す

インタビューをし、記事を書くという活動は、地域の人々と出会う動機と場を学生に与えます。そしてそこから学生は、地域についての知識を広げたり深めたりするとともに[3]、地域の人・社会と実際に「つながる」「つながっている」という実感を得ることができるのです。

さらに、記事を発信することで、地域の人の魅力や活動の意義を伝えたりすることが「社会参加」の一歩となります。「ときめき取材記」のウェブサイトは、世界とつながっており、海外の日本語学習者、日本語教育関係者にも読んでもらえます。地域と世界をつなぐ役を担う機会が与えられる、ということです。

また、記事作成後に学内で実施しているポスター発表会には、学内の学生や教職員だけでなく、地域の方々や、協力していただいた神奈川県観光協会の方の来聴もありました。学生は、記事の内容を来聴者に直接説明して伝える中で、自分の発信の意味を確認できる、来聴者の質問やコメントからまた新たな気づきが広がる、という発展も見られました。

3.「聞き書き」 でことばを深く観察し表現力を身に付ける

自分が話を聴きたいと望んだ人物との出会いと深い対話のインパクトは、記事を書いて伝えるための大きな原動力になります。文字起こしの作業は時間と労力を要しますが、録音した対話を繰り返し聴き、インタビュー相手の語り口をできるだけ残しながら、大切な部分を読者に伝えていけるように構成を考え、記事を作成する中で、日本語の使い方、話し方、表現の仕方を深く観察することができ

ます。

また、敬語など待遇表現についても、インタビュー依頼メール、電話、インタビュー本番でのあいさつや対話など、リアルなやりとりの中で、実践をしながら身につけることができます。

註

[1]「対話とは、世界を命名するための、世界によって媒介される人間と人間の出会いである」(フレイレ1970／小沢他訳1979: 97)、「他者との対話を重ねる中で互いの社会的関係性を構築し、両者にとっての新たな創造を生み出していく可能性をもっています」(池田・舘岡2007)、「「対話」はAとBという二つの論理がすり合わさり、Cという新しい概念を生み出す」(平田オリザ2001, 2012, 2015)、「自己と他者の関係を社会の中に位置づけ、その総体において、「この私」の在り方を考える、ここにこそ、本来の意味での、そしてこれからの時代の対話のインターカルチャー性(相互文化性)がある」(細川2019)など。

[2] 矢部2005, 2007

[3] 地域との関わりは、最初にインタビューのテーマと相手を検討する時から始まる。自分の興味関心と結び付けながら、地域に目を向け、情報収集をしてテーマやインタビューの対象を探す。さまざまな情報にふれながら、当初とは異なるテーマや対象にも興味を持つ場合もある。この段階でも、それまで知らなかった地域に関する知識が増える。

引用文献

池田玲子・舘岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門―創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房

平田オリザ(2012)『わかりあえないことから―コミュニケーション能力とは何か』講談社(2001年、小学館)

平田オリザ(2015)『対話のレッスン―日本人のためのコミュニケーション術』講談社

フレイレ, P.(1970)小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳(1979)『被抑圧者の教育学』亜紀書房

フレイレ, P.(1967-68)里美実・楠原彰・桧垣良子訳(1982)『伝達か対話か―関係変革の教育学』亜紀書房

細川英雄(2019)『対話をデザインする―伝わるとはどういうことか』筑摩書房

矢部まゆみ(2005)「対話教育としての日本語教育についての考察」リテラシーズ研究会編『リテラシーズ1』くろしお出版

矢部まゆみ(2007)「日本語学習者はどのように「第三の場所」を実現するか―「声」を発し響き合わせる「対話」の中で」小川貴士編著『日本語教育のフロンティア―学習者主体と協働』くろしお出版

「ときめき取材記」プロジェクトの特徴と取り組むことの意義③

義永美央子

1. オーセンティックな言語活動

私が初めて「ときめき取材記」プロジェクト（以下、ときめきプロジェクト）に参加したのは2017年の秋です（実践例⑤参照）。それ以前にも、自分の日本語の授業にインタビュー活動を取り入れたことはありましたが、活動がどうしても教室の中で閉じてしまうことに少し物足りなさを感じていました。教室外でインタビューを行う、インタビューの結果をまとめて発表する際に学生以外の方にも来ていただくとか、そうした工夫はしていましたし、学生もそれなりに楽しんでくれているようには見えました。しかし、どこか授業のためにインタビューの真似事をしているような、底の浅さが拭えなかったのです。

これに対し、ときめきプロジェクトの取り組みは、インタビューをした後にそれを記事にまとめ、ウェブサイトで公開する、という活動を伴います。ウェブサイトで公開する、つまり世界中の人が自分たちの記事を見てくれる可能性があるという点で、学生にとっての活動の真正性（authenticity）がぐっと高まるように思います。

また、ときめきプロジェクトとして具体的に行う活動を時系列に沿って挙げてみると、ウェブサイトに掲載されている記事を読む・自分の考えをクラスメートに伝える・グループで話し合ってテーマやインタビュイーを決める・相手の方にプロジェクトの趣旨を伝えてインタビューへの協力を承諾していただく・実際にインタビューをする・インタビューを文字化して記事の構成を考える・記事を書く・インタビュイーに記事の確認を依頼する・インタビュイーや教員、TJFの担当者からのコメントを踏まえて修正する、といったさまざまな行為が含まれています。こうした一連の行為を通じて、「読む」「書く」「話す」「聞く」といったいわゆる4技能を統合させた実際のやりとりを体験できることも、このプロジェクトの大きな特徴だと思います。

2. 他者や社会とのつながり

私のクラスでときめきプロジェクトに参加する学生は、学部の1、2年生が中心です。みんな瑞々しい感性や若々しい問題意識の持ち主ですが、実際の生活は大学と家との往復になりがちで、多くの場合、それほど広い人脈や豊富な人生経験を持っているわけではありません。そんな学生にとって、社会のさまざまな場で活躍する方と対面し、ゆっくりと深く話をする機会は、非常に貴重だと思いま

す。実際、インタビューを通じて、日本の社会や文化をより深く理解できた、当たり前と考えていたことを相対化したり、多面的に考えたりする機会が得られたと話す学生が多くいます。また、大半の学生がグループを作ってインタビューに取り組みますが、数カ月にわたって協力しあうことから、出身地や所属学部を超えた新しい友人関係が生まれることもあるようです。

また、授業を担当する私たち教員にも、このプロジェクトは新しい出会いや対話の場をたくさん提供してくれます。学生が「やってみたい！」と持ってくるテーマは、しばしば私にとっても新しいもので、学生たちの活動を支援しながら自分の視野が広がることを感じます。また、TJFや、同じプロジェクトに取り組む先生方と実践を共有し、悩みを語り合うことで、今後の改善のヒントが得られることもあります。

3. 活動の自律性といい意味での挫折経験

ときめきプロジェクトに取り組む中で、私は学生の自律性を重視することをいつも心がけています。授業としての統一テーマや活動の基本的な進め方など、教師が決める部分もありますが、誰に何を聞くのか、聞いたことをどのように記事にまとめるのか、という点では、学生自身の選択と決定をできる限り尊重しています。「先生が言うから」ではなく、自分なりの考えを持った人、自分の行動や発言に責任を持てる人になってほしいと考えるからです。

一方で、インタビューや記事執筆の過程には、インタビューへの協力を断られる、仲間内で意見が食い違う、締め切りまでの時間との戦い、思ったように記事が書けない、うまく書けたつもりがダメ出しを食らう……など、うまくいかない経験がつきものです。そうした葛藤や挫折を、教室というある程度守られた環境で経験し乗り越えることで、人間的にも成長できる面があるように思います。このあたりはまだまだ試行錯誤の連続ですが、教室を「失敗しても大丈夫な場」にして学生たちの挑戦をサポートできるように、日々努力しています。

「ときめき取材記」プロジェクトの特徴と取り組むことの意義④

荻野雅由

私は、2017年よりニュージーランドの大学（カンタベリー大学）で、「ときめき取材記」プロジェクト（以下、ときめきプロジェクト）を取り入れた日本語の授業を行っています（実践例④参照）。ここでは、海外の日本語学習者がときめきプロジェクトに取り組む意義について述べたいと思います。

まず、「日本語学習者から日本語者への移行」と「社会とのつながりを生み出す場の創造」の二つが挙げられます。加えて、参加する教師の視点からは「他大学の教師との学び」という意義があると考えます。

1. 日本語学習者から日本語話者への移行

日本人との接触や教室以外で日本語を話す機会が少ない海外の日本語学習環境において、日本語学習者から日本語使用者への移行を実現し、社会とのつながりを生み出す場の創造（学習環境のデザイン）は、ますます重要になると考えられます。その実現の方策の一つとして「プロジェクト学習」は大きな可能性を持っています。さまざまなプロジェクト学習の中でも、日本語使用者を対象としたインタビュープロジェクトでは、インタビューに必要な表現の学習と実際の使用を通して日本語の運用能力を高めたり、インタビュイーとのやりとりを通して母語以外の言語を使ったコミュニケーションの力を伸ばしたりすることが期待されます。

2. 社会とのつながりを生み出す場の創造

インタビュープロジェクトについては1990年代から多様な実践報告がありますが、インタビューを「自分が思い込んでいる「文化」を崩し、「文化」を新しい視点で捉えることにもつながってくる」（三代・千葉・森 2017, p.14）機会と捉え、オーセンティックな形で社会に公開するという三代らの実践は、社会とのつながりを生み出すプロジェクトワークとしての可能性の示唆に富んでおり、注目に値します。

教員やクラスメートに限定された読者を想定したコース課題としてのインタビュープロジェクトを越えて、社会に発信することを目標とする本プロジェクトは、インタビューのテーマを通したインタビュイーとの関係構築や、クラスメートである他者との協働が求められるため、学習者の主体性を育むことが期待できます。

3. 参加する教師の学び

2017年、ときめきプロジェクトに取り組むのと並行して、TJF主催の勉強会に、ニュージーランドからオンラインで参加しました。この勉強会は『外国語学習のめやす2012』（国際文化フォーラム2012）が提示するフレームワーク[1]を援用することをねらいとしていました。このフレームワークをプロジェクトの共通の枠組みとすることで、参加校の教員が、課題や成果を共有しながら、共に学んでいくことを可能にしました。

また、TJFでは参加校の教員を対象とした「勉強会」を開催するほか、このプロジェクトに取り組む教師間で情報共有できるグループをSNS上に構築し、教師が互いに学ぶ場もつくっています。私自身、こうした場を通じて、さまざまな学びを得て、成長することができたと思っています。

註

[1]「言語」「文化」「グローバル社会」の3領域における「わかる・できる・つながる」という三つの力を「学習者・他教科・教室外」の連携によって育むことをねらいとしている。

参考文献

国際文化フォーラム（2012）『外国語学習のめやす2012―高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』国際文化フォーラム

三代純平・千葉美由紀・森亮介（2017）「ひととひと・ひとと社会をつなぐインタビュー実践の可能性　国際文化フォーラム「ときめき取材記」の試み」『言語文化教育研究学会 第3回年次大会 言語文化教育のポリティクス 予稿集』pp.12–17. http://alce.jp/annual/2016/proc.pdf

第2部

「ときめき取材記」プロジェクトの実践

「ときめき取材記」プロジェクトの流れ

「ときめき取材記」プロジェクト（以下、ときめきプロジェクト）の手順には決まった型があるわけではありません。プロジェクトに取り組む先生たちがインタビュー活動を核としてそれぞれの状況にあった活動を組み合わせています。何を目標とするのか、対象は誰なのか、クラスの規模などによってインタビューの前後の学習活動は異なってきます。ただ、インタビュー活動の手順は自ずと同じような流れを進むことになります。先生方はSNSや勉強会などを通じて情報や資料共有を行い、TJFが提供する資料も含めてそれぞれアレンジして使っています。共有している資料の一部を巻末「資料」に掲載しています。

ここでは大きな流れを紹介します。

1. 準備活動（事前準備）

2. インタビュー活動

（1）企画書作成

学生は、疑問に思うこと・知りたいことから出発し、知りたいテーマを設定し、なぜそのテーマにしたのか、そのテーマに関わりインタビューしたい人を数人挙げる。（資料①「企画書フォーマット」参照）

⇒問題意識を明確にさせることはとても重要です。

⇒インタビュー期間が限られているため、日程があわず断られることがあります。断られたらすぐに次の候補者に依頼できるように数人挙げておく必要があります。

（2）インタビュー

①依頼、日程調整

⇒依頼文は相手に送る前に、担当教員がチェックします。なぜその人に話を聞きたいのかをきちんと書くことでOKをもらえる確率が高まります。（資料②「依頼文サンプル」参照）

②準備（資料を読み、質問を考える、どんな写真がいいかを考える等）

⇒インタビュイーが書いたもの（ブログなど）、その人のことを取り上げている記事、またその人の仕事や聞こうとしていることについて調べます。質問はできるだけたくさん考えます。ここで考える質問をそのままインタビューで使うことはなくても、質問を考えることがその人のことを知ることになります。「はい」「いいえ」では答えられないような質問を多く考えます。その

際、抽象的なことではなく具体的なことを聞くことがポイントです。
⇒インタビュイーの方のことを知ってもらうために写真も重要な要素です。文章では伝わらないこと、文章を補完するもの、インタビュイーの魅力を伝えるもの、どんな写真がいいのかを考えます。撮影できない場合は借ります。

③インタビュー
⇒インタビューは一回のみ、1～2時間が基本ですが、インタビュイーの了解が取れた場合は追加インタビューをする学生もいます。
⇒インタビューは録音します。インタビューの前に録音の許可をとっておきます。ICレコーダーやスマートフォンを2台以上用意します。

(3) 原稿作成
①文字起こし
⇒インタビューをすべて起こします。1時間で約1万字になるため、かなり骨の折れる作業ですが、インタビューのときにはぼんやりしていたことがわかったり、深い理解につながったりします。

②構成を考える
⇒ときめきプロジェクトでは、インタビュイーの方が語っているように一人称を主語にするか、Q&Aにするかのどちらかのスタイルにしています。一人称でまとめるほうが難易度が高いようです。
⇒何を伝えたいのかを考え、構成を練ります。
⇒どの写真をどこに配置するのかを決めます。
⇒記事のタイトル、小見出しを考えます。

(4) 原稿の確認
①担当教員によるチェック
⇒担当教員のコメントを受けて修正することを何回か繰り返して完成稿にします。
②インタビュイーによるチェック
⇒完成稿をインタビュイーに送り確認をお願いします。

(5) 記事の公開
①データをTJFに送付
⇒インタビュイーの了解が取れたテキストと写真データをTJFに送ります。ときめきウェブサイトに掲載されることを改めてインタビュイーに伝えます。

⇒テキストはTJFが用意しているフォーマットに入れます。
⇒インタビュイーの承諾後、記事を公開します。

3. 振り返りなど

⇒クラスでの発表や振り返りなどを行います。

次ページからの実践報告では、さまざまな教育現場の実践を次の項目に沿ってまとめています。

◆ときめきプロジェクトに取り組んだ動機
◆クラスの概要（授業名や学生数、コマ数など）
◆ねらい・目標
◆授業の流れ
◆評価
◆成果
◆ウェブサイトに掲載された記事一覧
◆課題

実践例①

三代純平（武蔵野美術大学・2019年度）

◆キーワード

日本事情、共修、協働、美術大学

◆プロジェクトに取り組んだ動機

私は、15年ほどインタビューを取り入れた授業活動に取り組んできました。インタビューという場を設定することにより、日常生活ではなかなか体験できないような「深い対話」を経験することができます。この深い対話から、学生は、ことば、文化、あるいは生き方を学んでいきます。だから、私は、ことばと文化の教育に、インタビューという活動は非常に有意義だと感じていました。

一方で、授業活動にインタビューを取り入れる上で二つの課題を感じていました。一つは、「浅い」インタビューに陥りがちであることです。もちろん「浅い」「深い」というのは主観的な感覚ではありますが、例えば、一問一答で淡々と進み、10分程度でインタビューを終えてきてしまう学生もいます。インタビューの技術、あるいは、心構え、モチベーションなどの向上が必要だと感じていました。もう一つは、「何のためにインタビューし、レポートにまとめるのか」というのがクラス活動では曖昧になりがちだということです。もちろん、クラスメートに読んでもらうため、あるいは、ブログ等で公開し、より広い読者に読んでもらうため、ということを説明してきましたが、担当教員である私自身がどこか嘘っぽさを感じていました。

そこで、TJFの「ときめき取材記」プロジェクトに参加することを決めました。TJFが管理するウェブサイト上に記事として取り上げてもらうことで、記事を書く活動に「真正さ」（オーセンティシティ）が生まれます。また、記事を公にするという状況で、学生にはより一層、聞くことと書くことに責任が生まれます。そして何より、学生たちは自分たちの記事がTJFのウェブサイトに掲載されることで、大きな達成感を手にすることができます。

◆クラス概要

授業名	日本事情I
期間	2019年4月～7月
時間数	週1コマ（90分）×14回
対象	26名（留学生13名・日本人学生13名）

＊留学生は、日本語能力試験のN2レベル以上を履修条件としている。
＊造形学部の1–4年生で、ファインアートからデザインまで専攻にかかわらず履修できる。

◆ねらい・目標

①インタビューを通じて、日本社会や日本で暮らす人々について考える。
②インタビューを通じて、日本社会で暮らすことの意味を考える。
③異なる価値観・文化を持つ他者と共に企画を立て、プロジェクトを遂行することを学ぶ。
④インタビューをするための表現を学ぶ。
⑤インタビュー記事を書くための表現を学ぶ。

文化学習と言語学習のそれぞれで目標を設定しています。①では、抽象的な「日本社会」ではなく、実際の人を深く理解することを通じて、多様な社会のあり方を考えることの重要性を学生には伝えます。また、②では、インタビューをした上で、社会の一員として、自分は日本社会でどう生きたいかを考えることをめざします。③においては、留学生と日本人学生の共修授業であることから、チームを構成する多様な背景をもつメンバーが共に一つのプロジェクトを遂行すること自体が、これからの日本社会で生きる上で求められていることを強調します。④・⑤においては、便宜上「表現」としていますが、人の話を「聞く」ということと人に話を「伝える」ということがどういうことかをつきつめていく授業であることを伝えます。美大生として「伝える」とはどういうことかを経験的に学ぶことを学生には求めています。

◆授業の流れ

（1）事前活動

①クラスメートとの模擬インタビュー（2コマ）

アイスブレークを兼ねてペアになり15分ずつ「なぜムサビに進学したのか」についてインタビューし合います。写真を1、2枚入れた相手の紹介記事をA4、1枚にまとめることを課題としました。インタビューでは、なるべく具体的な質問をし、読者であるクラスメートに相手の人柄と魅力が伝わるように書くことを意識させました。

TJF担当者に、写真と文章に関連性はあるか、読者にわかる文章、伝わる内容になっているか、といった観点で記事の講評をもらいます。

（2）企画書の作成（2コマ）

①グループ分け

3～4名のグループに分かれます。グループ分けは、いっさいことばを使用せずに、非言語コミュニケーションのみで、学科と国籍が一つにならないグループを構成するタスクを通じて行いました。非言語情報もコミュニケーションにおい

て重要であること、文化が異なるメンバーで作業することも、この授業の学びであることを学生には伝えます。

②テーマを設定する

2017年度までは、学生のプレゼンテーションによってクラスのテーマを選んでいましたが、テーマ設定に時間を取られることでインタビューの期間を十分に取れないという課題がありました。そこで、2018年度からは、クラス全体のテーマは、教師が設定しています。テーマは、学生たちの問題意識を尊重し、広く解釈ができるものでかつ、現代日本社会の多様な姿が浮き彫りになるものを設定するようにしています。2018年度は「アートな仕事」、2019年度は「境界」としました。以下、2019年度の流れを紹介します。

③企画書を作成する

グループに分かれ、「境界とは何か」「インタビュイー候補者のプロフィール」「なぜこの人か」「この人に何を聞きたいのか」を考え、企画書をまとめます。まず「境界」をどう捉えるかグループでしっかりと議論します。国籍の境界、伝統と革新の境界、日常と非日常の境界、境界を超えるためのユニバーサルデザインなどがグループごとのテーマに決まりました。その上で、各グループが、インタビュイー候補者を絞っていきます。

（3）インタビュー（3コマ）

依頼文を作成すると同時に、インタビューの仕方を学びます。

TJF提供の塩野米松さんによる講義動画を視聴し、どうすれば深いインタビューができるのかクラスで議論します。次に、録音・撮影の許可の取り方やインタビューの方法、記事用写真の撮り方などマナー面を含め、細かく指導します。その上で、グループごとに質問を最低20個考えます。質問をそのままインタビューで用いるというより、深くテーマに迫るためのブレーンストーミングが目的です。

アポイントメントが取れたグループからインタビューに移ります。インタビューは課外活動となり、アトリエを訪問したり、時には貸し会議室を予約したりして行います。

（4）原稿作成（5コマ）

①文字起こし

自分たちがより深く理解できるようにインタビューはすべて文字化することを義務付けています。1時間から、長いグループで4時間に及ぶインタビューをすべて文字化するのは、かなり大変な作業で、つらいと感じる学生もいますが、音

声を聞き直すことであらためてインタビューの意味が深く解釈できるため、意外と楽しくやっている学生もいます。

②構成を考える

文字化された資料を各自が読み込み、グループで話し合い、記事で伝えたいことを決めたら、そのために使う箇所や構成を考えます。大体5～10のエピソードを取り上げるように指導しています。

③原稿を書く

授業では、グループで記事の方向性や分担を話し合います。実際の記事作成の多くは、課題として授業時間外で行います。インタビュイーについてリサーチして、数時間お話を伺う過程で、記事の内容について自分たちは詳しくなっています。今度は、予備知識のない読者に自分たちの発見をどのような表現で伝えることができるかを考えてもらいます。

(5) 原稿の確認（2コマ）

①初稿の講評

13週目に記事の初稿を提出し、教師が講評を行います。読者に伝わらないところ、もっと深く書いてほしいところを指摘します。自分たちが伝えたいこと、インタビューで最も印象に残っていることを聞き出し、それと記事とのギャップをどうすれば埋めることができるのかを一緒に考えます。時には、文字起こしと記事をつき合わせながら修正案を検討することもあります。

②修正稿の講評

14週目には、13週目の講評を受けて、学生たちが修正した記事に対して、TJF担当者が、編集者の立場から講評してくれました。そのフィードバックをもとに、授業外でグループごとに教師と面談し、最終的な調整を行い、原稿を完成させます。

③記事の送付、掲載

完成した記事をインタビュイーに送り、掲載許可が取れた最終版をTJFに送ります。TJFが掲載許可をインタビュイーから得たのちにウェブサイトに掲載し、活動が終了します。

◆評価

評価は自己評価と参加度によって総合的に行っています。

(1) 自己評価

授業の過程で、ルーブリックを用いた自己評価を3回行います。1回目は、インタビューのアポイントを取ったあとです。企画への参加度、インタビュイーについてのリサーチ、アポイントを取る過程でのメールの書き方などを振り返ります。

2回目は、インタビューを終えたあとです。インタビューにおける質問、写真撮影やインタビューにおいて自分はどのように参加したか、グループでの協働や役割分担はどうであったか、などを振り返ります。

3回目は、記事を書き終えたあとです。他者に伝わる文章が書けたか、執筆における役割分担はどうであったか、などを振り返ります。

そして、最後に、活動全体を通じた振り返りとして、活動を通じて自分が学んだことと「日本社会」について考えたことをA4、1〜2枚のレポートとして提出してもらいます。

(2) 参加度

参加度をもっとも重視しています。教養科目としては非常に負担の多い授業であり、求められた作業に参加すること自体を大きく評価します。出席、課題である企画書、記事の提出を主に評価しており、記事やレポートの内容は、あまり重視していません。教育活動としてこのプロジェクトを考えた時、成果物としての記事よりも過程の方を重視したいと考えているからです。ただし、成果物としての記事をよりよくすることに全力を注ぐことは、インタビュイーに対する責任であり、この活動の前提になっています。

◆成果

このプロジェクトを通して得た学びを、学生側と教師側の視点でまとめます。

(1) 学生の学び

学生の振り返りに書かれていた学生の学びは、大きく次の3つに分類できます。

①協働
②社会におけるコミュニケーション
③生き方

本実践では、企画からインタビュー、記事作成までグループで活動しますが、学生によって問題意識や関心が異なり、意見の調整が必要になります。この授業は全学に開かれているため、ファインアートからデザインまで多様な専攻、学年、国籍の学生が集まっています。どのグループも日程調整、意見の相違、仕事

の偏りなど苦労を抱えながらも、記事を書き上げたことで、協働作業の重要性と、その方法を学んだ、という学生が多くいました。

- チーム員たちと意見を調整しながら相手の意見を尊重する方法を学ぶことができた。（韓国人留学生）
- 今回、コミュニケーションをとる、ということの大変さとやりがいについて改めて考える良い経験になったと思います。（日本人学生）

また、インタビューの依頼から、記事の確認まで丁寧にコミュニケーションをとることで、社会人として求められるコミュニケーションを学ぶことができたという学生も多くいました。

- この授業を通して、インタビューをするまでのプロセスやインタビューの仕方、文字起こしから記事を書くことなど、多くの貴重な体験ができました。アポ取りの時に相手のスケジュールを考えたり、メールのやり取りをしたりなど、ビジネスコミュニケーションのスキルも習得することができました。（中国人留学生）

この授業では、自分たちのロールモデルとも言える社会人たちにじっくり深く話を聞くことができます。アートやデザインを学ぶ学生たちは、一線で活躍するアーティスト、デザイナーに仕事や生き方についてお話を伺うことで、自分たちの人生を見つめ直したと言います。インタビューで聞いた話から多くを学んだとする学生たちは以下のように振り返りで述べています。

- アートを専攻とする学生として私は新しい価値：人のためのデザインについてもっと研究して考え、芸術と社会を引き継ぐ社会人になりたいと思った。（韓国人学生）
- 彼とのインタビューには新たな発見と刺激があり、そして「あー、自分も今後そのような柔らかい発想で芸術と向き合っていきたい。」との勇気もいただけた時間にもなった。（韓国人学生）

（2）教師から見た活動の意義

教師から見た本活動の意義は、以下の3点です。

①人の話を聞き、書くという経験をしたこと
②文化の異なるグループで一つのプロジェクトを遂行する経験をしたこと
③他者を通じて、自身のキャリアを見つめる経験をしたこと

まず、人の話をじっくり聞くという経験自体が日常の学業の中で希薄になっています。コミュニケーションの基本は「聞く姿勢」にあります。このことをインタビューの準備段階から強く意識できたことは、学生にとっての学びとなります。また、読者をしっかりと想定し、さらに何度も自分の文章を推敲することも大切です。どうすれば相手に伝わるのかを意識できたことは、これからの表現活動にも生きてくるはずです。また、特に「境界」に狙いを定めて話を聞いたことで、揺れ動く社会・文化の中で自分たちがどう生きていくべきかを、それぞれが見つめることができていたことも大きな成果だと考えています。

次に、育った環境や専攻が異なるメンバーでの協働も有意義な経験です。グループワークに対する考え方もスケジュールもばらばらのメンバーで、ときにはぎくしゃくすることもあったようです。緊張のあまりインタビュー中の写真を撮れなかったなど、失敗もたくさんありました。しかし振り返りを見ると、そうした失敗もいい経験として次に生かそうとしています。

最後に、この取り組みの最も重要な学びは、やはりインタビュイーの語りを聞くことです。美大で学ぶ学生は、アーティストやデザイナー、社会で活躍する方々の仕事への想いを聞くことで、自分のキャリアと向き合い始めます。「ときめき取材記」プロジェクトは、キャリア教育としても非常に大きな可能性を秘めていると思います。

◆ウェブサイトに掲載された2019年度の記事一覧

テーマ：境界

テーマ概要：空間、時間、自己と他者、それらを隔てる境界。この境界を考えることで、日本社会の輪郭を探りたいと思います。日本文化と他文化の境界に生きる人、日本と他国の境界を越えて活躍する人、伝統と革新の境界で新しいものを作り出す人、大学と社会の境界に学びの場を創出する人、そして、ユニバーサルデザインによって、境界を取り払う人……そんな人たちに話を聞き、「境界」から日本に迫りました。そこからは日本の今とこれからが垣間見えてきます。

記事タイトル	インタビュイー
フランス人の落語パフォーマー!?	シリル・コピーニさん（落語パフォーマー）
カンボジア人であり、日本人でもある私	諏訪井セディモニカさん（役者兼カンボジア料理屋家族経営
和の庭を取り戻す	村雨辰剛さん（庭師）
社会と人を繋ぐデザインの「新しい価値」	若杉浩一さん（デザイナー）
「hanare」というメガネ	宮崎晃吉さん（HAGI STUDIO代表取締役）
仏教のアップデート	稲田ズイキさん（煩悩クリエイター）
畳からバッグ!?	青柳健太郎さん（畳職人）
ユニバーサルデザインの挑戦 ～誰もが暮らしやすい社会をめざして～	武者廣平さん（武者デザインプロジェクト代表取締役）

◆課題

スケジュール上、振り返りの時間を十分に取ることができていません。特に、相互に振り返り、グループとしての課題を共有する時間が不足しています。体験を言語化することを通じてより学びが深まるので、振り返りのあり方を今後は改善していきたいと考えています。

実践例②

矢部まゆみ（横浜国立大学・2019年度）

◆キーワード

「訊く」と「聴く」、対話の深まり、留学生の神奈川発見、地域とのつながり

◆プロジェクトに取り組んだ動機

2013年度より、横浜国立大学国際教育センターにおける「日本語上級I」（留学生対象）の授業で、「留学生の神奈川発見！～神奈川を知ろう、伝えよう、つながろう」というプロジェクトに取り組んでいました。自分たちが学び生活する神奈川という地域の中で興味を持った場所や活動をテーマに選び、記事を書き、小冊子を作成する活動（矢部: 2015）の中で、留学生ならではの視点から捉えた地域の魅力を発信することが、留学生の地域理解および社会参加の一歩となり、また、地域の文化の新たな創造につながりうる、という感触を得てきました。

この授業では、文献調査と併せて、テーマとして選んだ場所や活動の現場に実際に足を運び、その場や活動にかかわる人へのインタビューを組み入れることを条件としていましたが、このインタビューをもっと対話的に深みのあるものにすることが、課題として常に念頭にありました。また、記事執筆の指導をより充実させるための方法論の確立や良質のリソース確保の必要性を感じ、模索していました。さらに、記事のウェブサイトでの公開の方法も検討していました。

そのような折に2017年3月にTJFから「ときめき取材記」プロジェクト（以下、ときめきプロジェクト）の話をきき、8月に勉強会に参加する機会を得ました。「これはまさに直面していた課題を解決し活動を充実させるためのリソースの宝庫だ」と惹かれるともに、他の教育機関における具体的な実践の先例にふれて、自分の現場に合わせて活用できる可能性を感じました。そして、自分も「ときめき取材記」を軸に授業を再構成したいと考えました。

◆クラス概要

授業名	日本語上級 I
期間	2019年4月～7月
時間数	90分×15回（授業時間）
対象	留学生6名（学部生2名、交換留学生4名）

＊2017年度から3学期実践をしたうち、2020年3月時点で最新のものについて記述

◆ねらい・目標

自分たちが学び生活する場所である〈横浜〉を含む〈神奈川〉という地域での

暮らしや活動にかかわるテーマについて、じっくり話を聞きたい人物を選び、インタビューを行い、記事を作成するプロジェクトを進める。このプロジェクトを通して、次のことをめざす。

①記事の企画のための話し合い、インタビュー依頼のための交渉、インタビューでの対話、記事の執筆などを通して、日本語の対話力・表現力を拡充する。
②地域社会とかかわりをもち、人とつながり、神奈川に暮らす一員として地域を理解する。
③留学生ならではのグローバルな視点を生かして地域に働きかけたり、地域の魅力を発信したりすることができるようになる。

◆授業の流れ

(1) 事前活動：プロジェクトの方向付け

① オリエンテーション（0.5コマ）

②インタビュー記事を読む、 話し合う（1コマ）

a. 授業内で、「ときめき取材記」ウェブサイトに掲載されている「言葉は通じなくても、感情は通じる」（江の島水族館でイルカ飼育を担当している奥山さんへのインタビュー記事）を読み、感想を話し合う。内容面と、書き方の面の両方から、気づいたことを述べ合う。
b. 宿題として、「ときめき取材記」ウェブサイトの中の記事を最低三つ読む。読んだ中で一番いいと思った記事と、その理由をワークシートに記入し、次回のクラスで話し合う。また、そのインタビュー記事を書くために、インタビュアーはインタビュイーにどのような質問をしたか想像してリストアップしてみる。

③クラスメートとのインタビューミニ体験（0.5コマ）

ペアで相手に質問をして、「その人の魅力」を探り、そのあと、4人グループになって、それぞれに発見した「その人の魅力」を報告し合う。

(2) 企画書の作成：インタビューの準備

①自分（たち）のテーマとインタビュイーを検討する、調査する（1コマ）

「神奈川という地域での暮らしや活動に関するもの」という大きな枠の中で、自分が取り組みたいと思うテーマと候補者（できるだけ複数）を考え、情報収集してきて、クラスで報告する。テーマの類似性・共通性があれば、グループで取り組むメリットを伝えて協働活動を推奨し、グループ編成がしやすいようにする。

一方で、個人でテーマを貫きたい学生には、その思いも尊重し、個人で取り組むことも選択できるようにする。

②執筆要項を確認する、企画書を作成する（0.5コマ）

記事の「執筆要項」には次のように「基本方針」を示し、学生と話し合いながら共有するようにした。

基本方針：

・「神奈川という地域での暮らしや活動にかかわること」をテーマとする。
・「人」を通してテーマを見る。
・そのテーマに深くかかわっている人にインタビューをする。
・その人の考え方、その人が大切にしていることなどを、話してもらえるように質問する。
・その人が取り組んでいることの意味や魅力が伝わるような記事を書く。

③取材申し込みのメールの書き方等を学習する（0.5コマ）

取材の依頼文のサンプル（資料②）を配付し、どのような内容で、どのようなことばを使って取材の依頼をするかのポイントを確認する。サンプルを参考に、自分のテーマ、相手に合わせて依頼文を作成する。その際に、なぜその人にインタビューさせてもらいたいか、どのようなことを聞きたいかについて、具体的にわかりやすく記述することに特に留意する。

④取材申し込みメールを送付する（授業時間外）

取材申し込みメールを点検し、担当教員のフィードバックを得た上で送付する。メールは、担当教員をccに入れて送付する。

⑤進行スケジュールを管理する（0.5コマ）

「プロジェクト進行表」（資料③）を配付し、インタビュー、文字化、記事作成、中間発表、記事推敲、確認、ポスター発表の段取りを確認する。自身の進行スケジュールを検討して書き込み、グループメンバーや教員と共有できるようにする。

⑥インタビューのしかた、記事の書き方について学習する（3.5コマ）

a. TJFから提供された資料やビデオを活用しながら、インタビューのしかたや記事の書き方について話し合い、確認する。
b. インタビュー当日の具体的な段取り、あいさつやマナー、録音や写真撮影

における留意点などについて話し合い、確認する。

c.「ときめき取材記」や「My Way Your Way」（TJFが運営するウェブサイト「くりっくにっぽん」のコーナー）に掲載されている記事を、クラスで読みながら、構成や表現の工夫、見出しの付け方などを観察・分析する。「聞き書き」で一人称で書く場合と、Q&Aで書く場合の効果の違いを検討する。自分（たち）はどのようなスタイルで書きたいか、どのような工夫をしたいか考える。

（3）インタビュー（授業時間外）

（4）記事作成

①インタビューを文字化する（授業時間外）

インタビュー直後に、聞いた話の要点をメモにまとめる。記事にまとめたいと思う部分を優先して文字化を行う。

②インタビューの報告をする（2コマ）

③インタビュー記事を書く（授業時間外）

④記事を推敲する（1コマ）

クラスメートと読み合い、意見交換する。教師からもフィードバックを与える。

⑤インタビュイーに記事の内容を確認してもらい公開の承諾を得る（授業時間外）

（5）ポスター発表会（3コマ）

ポスター発表会は学内のメーリングリストや、ポスター掲示等で広報し、クラス外の学生・教職員、地域の方などに来聴してもらうようにする。インタビューに協力してくださった方にも案内する。学生はそれぞれインタビュー記事のポイントを紹介し「記事を読んでもらいたくなるようなポスター」を作成し、発表する。興味をもってくれた人に、記事を印刷したものも配布する。「ときめき取材記」ウェブサイトに掲載するに至らなくても、このポスター発表会で自分の記事を「公開」することを授業における目標とする。

（6）振り返り、総括（1コマ）

振り返りシートを記入・提出する（「記事の執筆や発表において、自分が工夫したり努力したりしたこと、学んだこと」「クラスメートの記事や発表で心に残ったものと、その理由」「プロジェクト全体の取り組みの中で自分が身に付けたり伸ばしたりすることができたと思う

力」「全体的な感想」)。車座になって、振り返りシートに記入したことの中からポイントを選んで、口頭で述べて分かち合う。

(7)「ときめき取材記」ウェブサイト投稿にむけての作業(希望者のみ)

◆評価

①プロジェクトの各段階での課題への取り組み・提出物50%、②発表20%、③完成記事30%、を合わせて総合的に評価しました。

◆成果

成果の概要については、第1部で述べましたので、ここではその考察の基となった具体例を見ていきます。

(1)「訊くこと」と「聴くこと」からの対話の深まり

①「彫って塗ることの意味―鎌倉彫」
(鎌倉彫協同組合理事、鎌倉彫資料館館長へのインタビュー記事)あとがきより

- 私は最初(中略)伝統文化系の権威意識はあるか、機械を使っての大量生産についてのお考えなどを伺ったのですが、それに対して柏木館長は、「少しの人にでも理解されて、欲しいなと思ってくれている人がいれば、それで鎌倉彫はこれからも続いていく」と答えて下さいました。また、インタビューの前に、鎌倉彫の体験教室にも参加して、一つの作品が作るのには、本当にたくさんの手間がかかって、丁寧に彫っていくことが重要だという事を直接体験しました。それで、インタビューの中で「彫って、塗る」という言葉がとても印象に残りました、本当につぶやくように話されていましたけれども、その二つの単語に、どれだけ深い意味が込められているか思うと、粛然とします。そこで、結局大切なのは、「相手がどうであれ、自分が大事だと思うその本質的なことを頑張って、それを理解してくれる人が現れること」だったのだと思います。それで私は、これからもっと自分の任されたことに一生懸命に取り組む練習をして、私のやっていることを理解してもらいたいです。

②「将棋の志―将棋を指す意味」
(横浜国立大学将棋サークル「若葉会」主将へのインタビュー記事)あとがきより

- インタビューをする前の私は将棋ソフトによって戦法が発展したから当然、将棋ソフトを使用することについて異論はないと思っていました。しかし、本川さんの話を聞いて将棋ソフトにより町道場で将棋をさしていたおじさんたちの固有の戦法がなくなっていると知りました。将棋を楽しむ方法には色んな方法

があると思いますが、相手を自分の力で倒すという面白さはソフトによって消えてなくなっているのです。強くなると勝つから面白くなるだろうと思って戦法だけを勉強していた私にとって、その言葉はすごく胸に刺さるものでした。将棋だけではなく、人生のすべてのものに通用するその言葉は私に「楽しむ」こととは何なのかをもう一度思い出させてくれました。

③振り返りのコメントより

- 対象が誰なのかを考えて自分の行動を変える力と、重要なポイントが何かを弁える力を身に付けることができたと思います。インタビューの対象が変わったことで質問を変えなければならなかった時、本川さんはどんな人なのか、どんなことが好きなのかについて考えながら質問を変えました。そしてインタビューをしながら適切に質問を変えて質問しました。記事を書くときは対象となる読者が興味を持ちそうな記事を書こうと思い、質問と答えを選びました。発表をしながらも重要なポイントだけを伝える技術が出来たような気がして自分が成長したと感じました。

(2) 地域とのかかわり：地域と出会う、知る、理解する、つながる、つなぐ、新しい意味や価値を生み出す

①「誰かが喜んでくれれば―日本の動物保護」
（神奈川県動物保護センター職員へのインタビュー記事）あとがきより

- イギリスでは動物保護センターがたくさんあるということを当たり前のこととして思っていました。しかし、日本に来てからそうでもないと気づいて、ほとんどの国では動物保護センターの数はイギリスほど多くないですが、かなり少ないか全くないという場合もあるとわかりました。せっかく日本に留学しているので、日本の動物保護の状態について知りたくなって、佐藤さんとインタビューする機会ができて嬉しかったです。私と同じような形で、イギリスの保護センターを見学した佐藤さんの話を聞いて、色々なことに共感できました。（中略）動物のために頑張っている動物保護センターの佐藤さんと職員さんに感動して、忙しい仕事の中で、見学とインタビューをさせていただいたことをとてもありがたく思います。新しい建物で明るい未来に向かっている動物保護センターに対する関心を高めて、応援をしていきたいと思っています。

②振り返りのコメントより

- テーマである鎌倉彫について知ったことが良かったと思います。私も鎌倉は鎌倉幕府が開かれた場であって、歴史のある寺が多い所だという事ぐらいは知っていましたが、こんな工芸品があったとは知りませんでした。

- この授業を通して、コミュニケーションの能力を身に付けるだけでなく、神奈川県の名物と文化を認識できた。
- 今回のインタビューがきっかけで、海軍カレーの起源を知るだけでなく、よこすかカレーフェスティバルにも見学できてよかったです。インタビューする前に、事前に情報や知識などを調べて色々な質問も用意しましたけど、松本さんと保坂さんが私よりもっと豊富な情報と資料を準備してくださったことに感謝します。

(3)「聞き書き」で表現力を身に付ける

①振り返りのコメントより

- 最初はインタビューをして文字起こしをそのまま写せばいいと思っていました。しかしそのうち文字起こしをそのまま写せば読者が理解できないということに気づきました。そして分かりやすい記事を書くためには内容に流れがあって、質問と答えの順序を変えた方がいいことにも気づくことが出来ました。一度も記事を書いたことがなかった私にとってこの授業はその部分を教えてくれたいい経験でした。そして「分かりやすく書く」という力はこれからの私の人生においても十分役に立つ素晴らしい力だと思います。
- これまでに第一人称のインタビュー記事を書いたことがないので、インタビューの内容をできるだけ変えないで、インタビュイーの言葉のままで記事を作成する能力を身につけたと思います。
- 構成がテーマからズレないことに工夫しました。また、読者にインタビュイーのことをもっと理解できるように、なるべく〇〇さん（インタビュイー）の言葉のままで、わかりやすい内容を取り上げて記事にしました。
- インタビューが終わった後、読者に分かりやすく読んでいただくため関連性のある質問を選択し、一貫性を維持しようとしました。語彙の面ではなるべく〇〇さんの話や感情、考えが正確に伝わるように書くことを基本的に考えましたが、読者の理解度も重要だと思ったため、〇〇さんの説明の中で分かりにくいものは順序を変えたり、前後に若干の説明を加えて、最大限分かりやすく書きました。
- インタビューの依頼を書くときに、敬語を使い、今まで書いたことがないプロフェッショナルなメールが書けるようになりました。将来、仕事で役に立つと思います。
- 相手に連絡したり訪問したりし、メールの書き方やあいさつ、どうやってインタビューをスムーズにするか、勉強になった。
- フォーマルなメールのお手本を見て、敬語ももっと勉強しなければならないと思った。

- インタビューの相手に送るメールはここを気を付けた方がいい、こういうふうに連絡したらいいというアドバイスをもらえて、本当にやったこともなかったので、それがすごく助けになりました。

◆ウェブサイトに掲載された2019年度の記事一覧

記事タイトル	インタビュイー （インタビューの相手）	担当者 人数
「絵巻寿司で、笑顔の輪を広げていく」	中矢千賀子さん（絵巻寿司検定協会会長）	1
「誰かが喜んでくれれば」	佐藤裕郁さん（神奈川県動物保護センター職員）	1
「横須賀市と海軍カレーとの絆」	松本雄次さん・保坂亜由美さん（横須賀市役所職員）	1
「彫って、塗ることの深味―鎌倉彫―」	柏木豊司さん（鎌倉彫協同組合理事、鎌倉彫資料館館長）	1
「将棋の志―将棋を指す意味」	本川卓佐さん（横浜国立大学将棋サークル「若葉会」主将）	1

◆課題

ときめきプロジェクトは、深い対話と学びの環境設定ができることが大きな魅力ですが、社会とのリアルなつながりの中で動くだけに、インタビューの依頼をしたり、記事の承諾を得たりするプロセスにおいては、学生の主体性をできるだけ尊重しつつも、教員として細心の目配りとフォローの備えも必要になります。インタビュイーの立場によっては、個人的な経験や思いを語ってもらうのが難しい場合もあります。大きな会社や役所の広報の担当職にいる方などは、組織を代表して話をする立場にあるため、豊富な情報をわかりやすく説明してくれ、情報の聞き取りという面での学びはありますが、個人的な声を「聴く」ことに踏み込みにくいこともあります。この点はインタビューの企画の段階で留意して、学生と検討する必要があります。

また、記事を書き上げて公開まで果たせたときの達成感は学生にとって極めて大きいのですが、時間の制約をどう乗り越えるかも課題の一つです。15回の授業の中で記事を完成させ公開できるまでの状態に持っていくためには、限られた時間数で何を優先し、どのプロセスをそぎ落とすことができるのかに葛藤が出てきます。学生にとってはわずか1単位の科目なので、それに比して課題の負荷が大きいと、履修のハードルが高くなります。授業オリエンテーションを経て、履修登録に至る学生は、単位数にかかわらずチャレンジしたいという意欲の高い学生ですが、学期終了後に過度に学生を拘束することは原則として避けなくてはなりません。

学生自身が思い入れのあるテーマを追求したいという動機が、困難を乗り越えて記事を執筆していく原動力となるため、横浜国大のプロジェクトでは、個人で好きなテーマを追求することも認めており、これまでは、実際には、ほとんどの学生が個人で記事を書き上げることを希望していました。この場合、インタビュー相手と、１対１のより密度の濃い対話を経験できますが、グループで一つの記事を取り組むことによるメリット（グループ内でのディスカッションの深まり、協働からの学び、文字起こしなどを分担することによる作業負担の軽減）を享受しにくくなります。

それぞれの記事を読み合って、記事の構成や内容についての質問やコメントは出し合えていますが、細かい日本語の表現についてお互いに推敲し合うほどの時間的な余裕や力量を留学生に期待するのは難しい面もあります。日本人学生との共修ではないため、日本語の表現や文法面で、教師が一人ひとりの学生に細かいフィードバックを与えていくことも覚悟がなければならないでしょう。教師が単純に修正案を出して学生がそれに従って修正するのではなく、自分たちで表現を見つけていってもらうようにするには、対面での対話を通して表現を探すことが必要になりますが、その時間を十分に確保することが難しいこともあります。公開する記事に求められる完成度とのジレンマが生じます。

以上のような課題もありますが、ここで心強いのが、ときめきプロジェクトでは他校の実践者の方々との交流、情報交換ができることです。これが課題解決のための力になるだけでなく、授業に取り組む喜びを感じさせてくれます。このような環境に感謝しています。

引用文献

フレッチャー、カラ（2019）「誰かが喜んでくれれば」https://www.tjf.or.jp/tokimeki/

キム・ジョンミン（2019）「彫って、塗ることの深味―鎌倉彫―」https://www.tjf.or.jp/tokimeki/

キム・ソヌ（2019）「将棋の志―将棋を指す意味」https://www.tjf.or.jp/tokimeki/

シャー・ティファニー（2019）「絵巻寿司で、笑顔の輪を広げていく」https://www.tjf.or.jp/tokimeki/

ソウ・ハクカイ（2019）「横須賀市と海軍カレーとの絆」https://www.tjf.or.jp/tokimeki/

矢部まゆみ（2015）「地域社会とのつながりの中から留学生が学ぶもの―プロジェクト活動「留学生の神奈川発見！：神奈川を知ろう・伝えよう・つながろう」実践からの考察」横浜国立大学国際戦略推進機構編『ときわの杜論叢』第２号（pp.102–116）: https://ynu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=5977&item_no=1&page_id=59&block_id=74

実践例③

重信三和子（OLJランゲージアカデミー・2017年度）

◆キーワード

日本語学校、プロジェクトワーク、協働

◆プロジェクトに取り組んだ動機

国内の日本語学校には、学んだ日本語を使って実際に日本人と話したいと思っている留学生が、たくさんいます。そのような学生の希望は試験対策をしているだけでは叶えられませんが、教室を出れば日本語話者に囲まれている環境を使わない手はありません。実際に日本語話者と話す機会を作る目的で、私は以前から日本語学校の授業に学校の外でインタビューをしてくる活動を取り入れてきました。誰かに日本語でインタビューして、授業でその成果を発表したり文章にまとめたりしたのです。この課題のために警察署に行って警察官にインタビューを試みた学生や、居酒屋でたまたま隣に座ったお客さんに話しかけて日本の政治についてインタビューをしたという学生もいました。それは教師にとっても大層刺激的で、教室での発表だけに留めておくのが惜しいと思うほどでした。

そんなとき、インタビューを記事にまとめてウェブサイトで公開している「ときめき取材記」プロジェクト（以下、ときめきプロジェクト）を知りました。過去に取り組んでいたのは大学生ばかりだったので、果たして日本語学校で行えるか不安もありましたが、ちょうど上級クラスを担当していたこともあり、プロジェクトワークの授業として学校の許可を得て挑戦することにしました。

◆クラス概要

授業名	日本語上級クラス
期間	2017年4月14日～6月21日
時間数	1コマ（90分）×16回
対象	11名　（中国10名、ミャンマー1名）

◆ねらい・目標

留学生は、日本での生活を始めてから自分の国と違う社会や文化のありように気づき、疑問に感じることや知りたいことがたくさんあるはずです。そのような疑問（この授業ではそれを「はてな？」と呼びました）について、日本に暮らす人にインタビューをして考えてみることが、この授業の大きなねらいです。学んだ日本語がどのくらい使えるかという語学上の意義も大きいですが、日本社会に生きる人に主体的に

アプローチして話を聞くことが、学生にとって得がたい経験となるでしょう。

最近は問題が生じればケータイを取り出して何でも個人で解決できるようになり、学生同士のつながりが希薄になっています。そこで活動は個人ではなく、グループで行うことにしました。グループ活動では、ことばを使うことはもちろん、お互いの合意を得て活動を進行させるためのコミュニケーション力や調整力も求められます。そのような意見のすり合わせのプロセスは社会性を育みます。ときめきプロジェクトでは、インタビュー活動の成果がウェブサイト上で公開されることで、社会とのつながりを感じることができるはずです。

以上のことから授業では次の三つの目標を設定しました。

①日本で学ぶ留学生として自国と異なる社会に対して問題意識を持ち、インタビューを通してその問題について深く考える。
②協働で活動を行うことで、人とのつながりを作り、社会性を養う。
③活動を発表・公開することにより、社会とのつながりを実感する。

◆授業の流れ

(1) 企画書の作成

①導入・テーマ話し合い（1コマ）

「ときめき取材記」ウェブサイトで実際に公開されている記事を紹介して、これから行う活動の概要を説明しました。［はてな？にっぽん］というキャッチフレーズを提示し、留学生として日ごろ感じている「日本の社会に対する疑問や知りたいこと」について考えようと提案しました。

まずはクラス全体で取り組むテーマを決めるため、小グループになってどんなテーマがいいか話し合いをしました。当日は出席者が10名だったので3・3・4人の3グループに分けました。話し合いが活発なグループもありましたが、メンバー同士があまり打ち解けないままのグループもありました。次回はテーマを決めるためのプレゼンテーションを行うことを予告して、その準備を課題としました。

②テーマの決定（1コマ）

インタビューのテーマを決めるためプレゼンテーションを行いました。1人ずつ前に出て、教室のホワイトボードにテーマを書き、「はてな？」と感じることを述べながらプレゼンテーションをしてもらいました。学生たちは発表ごとに感じたことを述べ合い、質問をして、議論は予想以上に盛り上がりました。ボードに書かれたテーマは「留学」「教育」「外来語」「定年生活」「厚底靴」「お湯」「クラス替え」「いじめ」「宅配」「カレー専門店」「美容」で、身近なものから大きなものまでさまざまなものが並びました。テーマは話し合いで決定するつもりでし

たが、議論に時間をかけすぎてしまい、結局多数決で決めました。その結果、Sさんが提案した「定年生活」（定年後の生き方、老後）に票が集まりました。活発な議論の割にはあっけなく多数決で決まりましたが、特に不満は出ませんでした。学生たちが一生懸命考えてきたテーマの中から何をどのように選ぶのか、選定の仕方が難しいと感じました。

③グループ決定＆話し合い（1コマ）

グループで活動するにあたりグループ分けを行いました。グループは学校で使用している個人の学生カードをシャッフルして教師がランダムに決めました。4・4・3人の3つのグループ（A班・B班・C班）が決まり、それぞれのグループごとに名前をつけてもらってから、テーマである「老後」にどのような観点で迫るか話し合いに入りました。

グループでの話し合いを見ていると、自然にリーダーのような役割をする学生が出ていました。あるグループは「お金」、あるグループは「運転」から定年後に迫ろう、といった意見が出ていました。老後のお金に関心を持つグループからは、日本では年金をどのようにもらうのかと質問が出ました。

テーマを提案したSさんが積極的にリードしてLINEのグループを作りました。教師が今後のスケジュール表を配付し、次回までにインタビュー対象者（インタビュイー）を考えてくることを課題としました。

④グループ話し合い（2コマ）

a. インタビュイー選定

グループごとに誰に話を聞くかを話し合いました。A班は「老人ホーム」の人に話を聞きたいと携帯で調査していました。B班は、リーダーの下よく結束していて進展が早く、アルバイトで顔見知りのお年寄りにインタビューすることを決めていました。C班は「再就職した老人」という観点を考えていましたが、合致するインタビュイーがなかなか見つからない様子でした。担当教師が、学校で最年長の日本語教師であるT先生についての情報を伝えると、ぜひT先生に話を聞きたいということになりました。

b. アポイントメント

インタビュイーと交渉する時間を設けていましたが、すでにグループごとに進捗が異なっていたので、インタビュイーの調査、選定や質問内容を考える時間としました。

A班は、インタビューの依頼のために学校近くの老人ホームに直接交渉に行きましたが、録音やネットに掲載することに承諾を得られず、「ダメだった」と言って戻って来ました。B班は、インタビュイーも日にちも決まり、他のグループ

より余裕の様子でした。C班は、T先生に直接お願いに行き、交渉が成立しました。A班からは、後日、LINEで別の老人ホームの職員の方にインタビューが決まったと連絡がありました。

⑤ゲストトーク（1コマ）

TJFの担当者から、ときめきプロジェクトの趣旨、インタビューの手順やマナー、写真を撮る際の心構えなどについてたっぷり話をしていただきました。「インタビューは相手の目を見て」「写真は同じものを何枚も撮る」など、インタビューや写真を撮る際の具体的で実用的なお話が聞け、これからインタビューを行う学生たちにとって大変有意義な時間になりました。毎週同じ教師の授業を受けている日本語学校の学生にとっては、ゲストトーク自体が新鮮に感じられたはずです。週末にインタビューを控えているグループもあって、学生たちはみな食い入るように聴いていました。

（2）インタビュー

⑥インタビューの準備（2コマ）

インタビュイーについての調査、質問内容の相談、日本語発話の練習、インタビューに行く際の注意点の確認など、グループごとに準備を進めました。

一番にインタビューが決まっていたB班が、先方とのトラブルがあってインタビューがキャンセルになってしまったと言ってきました。その後探した3人の対象者にもすべて断られたと言います。時間的な制約もあるので、仕方なく教師が知人の映画監督に連絡して、インタビューをお願いすることになりました。B班は慌てて調査をやり直しました。

⑦インタビューに行く（1コマ）

インタビューは、先方の都合があるので、授業時間内に行っても授業時間外に行ってもいいことにしていました。B班とC班は、授業時間外にインタビューを行いました。A班は、授業時間を使って老人ホームにインタビューに行くことになり、インタビューの直前に教室で最終確認を行いました。まだ質問が固まっていない部分もあったので、「聞きたいことの柱を持ちつつ、やり取りの中で聞きたいことを自然に聞けばよいのでは」と教師がアドバイスしました。メンバー全員緊張の面持ちで出かけてから1時間ほどで戻って来ました。学生たちはいいインタビューができたと満足気でした。インタビューの録音を少し聞かせてもらうと、先方が好意的な感じがよく伝わってきました。もともと老人ホームに関心を持っていたメンバーの一人が、「いつかこのホームでボランティアをしたい」と話したのが印象的でした。

(3) 原稿作成

⑧文字起こし（3コマ）

インタビューが終わると録音データをそのまますべて日本語に書き起こす「文字起こし」をします。文字起こししたものは、記事を作成する上で貴重なデータとなります。どのグループも黙々と録音を聞いて作業をするので、教室の中は静かになりました。インタビューの長さによって負担は異なりますが、この作業は予想以上に時間がかかりました。聞いた日本語をそのまま文字に書き起こすのは上級の学習者であっても容易ではなく、何と言っているかわからないと度々質問を受けました。日本語力は相当鍛えられると感じました。

文字起こしが終了したら印刷して内容を確認をします。この段階で教師も録音データを聞いて日本語表記の修正を手伝いました。

⑨原稿を書く（3コマ）

「ときめき取材記」ウェブサイトにすでにアップされている記事を見ながら、これから必要になる過程を確認しました。記事を書くには、まず文字起こししたデータを読み直してトピックを整理し、インタビューのどの部分を残していくか話し合いながら編集を行います。パソコンを持っている学生は自分の機器を持ちこんで作業を行いました。中国の学生が多いので作業中は中国語が多く聞こえてきました。

記事が完成した後は、全体のタイトルとリードを決める、写真を選ぶ、インタビューの概要文や学生ひとりひとりの感想を書くなど、ウェブサイトにアップされるまでに必要な工程がまだいくつかあります。すべてが整ったらインタビュイーに記事を確認してもらい、先方の許可を得たのちに公開の運びとなります。

(4) 全体の振り返り（1コマ）

授業は最終日を迎えましたが、文字起こしに時間を使いすぎてしまい、学期中に記事を完成することができませんでした。記事は未完成の状態でしたが、活動の統括として、今回の取り組みに対する自己評価や感想を書いてもらいました。最後に、今後の流れについてプリントを配付して説明し、授業時間外の課題として記事を仕上げることを了承してもらいました。

この後、教師がグループのリーダーと連絡を取りながら記事の仕上がりを待ちました。結局、予定より数カ月遅れて記事が完成しました。

◆評価

毎回、授業終了時に「振り返りシート」を記入してもらいました。シートにはその日の活動内容・課題・感想を書き、自分自身で活動を振り返って4段階の自

己評価を行いました。

今回のプロジェクトワークは学校の定期考査に組み込まず、成績には加味されませんでした。学生は活動に真摯に向き合っていましたが、最終的に記事の完成が遅れていったのは、他者による評価がなかったことが影響していたのではないかと感じます。

◆成果

今回の活動では三つのグループが「老後」をテーマとして、それぞれ老人ホーム施設長・映画監督・日本語教師にインタビューを行いました。時間はかかりましたが、どのグループも記事を完成し公開することができました。活動後に書いてもらったアンケートを見ると、活動によって自分の成長を実感したというものや、自分の生き方と重ね合わせて前向きになったという感想が見られ、多くの学生が活動に満足していることがわかりました。

アンケートで一番多かった感想は、「協働の大切さに気づいた」というものでした。活動が多岐にわたっていたので、個人ですべてを行うには負担が大きく、協力し合うことで目標に到達できたと感じたのでしょう。学生が共に学び合うことの意義を実感できたことは、「協働」をめざした教師にとって大きな収穫でした。

以下は学生が書いたアンケートの一部です。

- 日本語の勉強だけでなく皆さんと一緒に頑張って自己の協調性もアップしてきました。自分はいろいろな面で足りない部分も多いと知りました。
- メンバーそれぞれ考え方を持っているから、一人が考えなかったものは他のメンバーそれぞれが補って、いい経験でした。
- 日本人と交流できることはともかく、自分たちでインタビュイーを選ぶことやアポイントメントを取ったり、すべて考えなければならないので勉強になりました。
- 留学生として日本社会及び文化についてより深く理解し、コミュニケーション力も高まりました。このような活動を通して人とのつながりを作り、社会性を養うこともできます。とても面白く、大切な経験だと思います。
- お年寄りの定年生活を聞いて、日本の少子高齢化という社会問題をより深刻に理解した。
- 監督のこだわりや撮影中経験したことなどを聞いたのも、自分の将来のことを考えるいいきっかけになったと思います。
- 日本にいる間、言葉を理解できなかったり、人間関係に困ったり、勉強がうまく進めなかったりしました。しかし先生の話を聞いて、順調に行かなくても、努力すれば必ず克服できるし、それが大切な経験になるということがわかりました。
- やる前はどこから始めてやるか全然わからなかった。インタビューするのがす

ごく怖かったです。でも今はもはや怖いよりすごく楽しいと思った。インタビューって実際に行わないとその楽しさをわからない。プロジェクトワークを通して本当に成長しました。

◆ウェブサイトに掲載された2017年度の記事一覧

テーマ：老後

テーマ概要：誰にでもいつか必ずやってくる老い。年老いたらどのような生活を送るのかは、いつかは誰もが向き合わねばならない課題だ。日本では60代、70代のシニア世代の方々が元気に働いている。趣味を楽しむ一方で、これまでの経験と知恵を生かして社会に貢献するシニア世代の働くことに対する思いを探った。

記事タイトル	インタビュイー
笑顔溢れる定年生活	金川宗正さん（老人ホーム「池袋敬心苑」施設長）
すぐに答えを求める前に現実を見て	岩崎雅典さん（映画監督）
60歳でも人生を変えられる	竹村潤二さん（日本語教師）

◆課題

授業時間内に原稿を仕上げることができなかったことが、一番の課題です。限られた時間の中で完成までもっていくには工夫が必要だと感じました。テーマをあらかじめ設定しておくのも一つの方法でしょう。録音データの文字起こしはインタビューの全体を知るために必要な作業ではありますが、それ自体が目的ではないので、状況に応じて必要な部分だけにするなど、柔軟に考えていいのではないかと思います。3カ月タームで学期を組む日本語学校なら、2学期間にわたって取り組めば、もう少し余裕を持って活動ができるかもしれません。学生のモチベーション向上のためにも、活動の評価のあり方を再考することが課題だと感じました。

インタビューを記事にする段階で、もっといい話が聞ければよかったと残念がっていたグループがありました。予定していたインタビュイーがキャンセルになって慌てて変更したグループもあり、インタビュー前の事前準備が十分だったとはいえませんでした。興味深い記事が書けるかどうかは、インタビューで内容のある「深い話」が聞けるかどうかにかかっています。薄っぺらな興味で話を聞いても、薄っぺらなことばが返ってくるだけで、決していいインタビューにはなりません。内容の濃い「深い話」を聞くためにはどうしたらいいか。そのためにはインタビューを行う前に十分に時間をかけて下調べを行う必要があるでしょう。相手について知りたいと思う強い気持ちを持ち、なぜその人に、何を聞きたくてインタビューするのかを明確にしてインタビューに臨むことが何よりも大切だと思います。

実践例④

荻野雅由（NZカンタベリー大学・2019年度）

◆キーワード

海外、日本語学習者から使用者への移行、越境、つながりを生み出す場の創造

◆プロジェクトに取り組んだ動機

第1部で述べたように、海外の日本語学習者が「ときめき取材記」プロジェクトに取り組む意義として、①日本語学習者から日本語使用者への移行と②社会とのつながりを生み出す場の創造の二つが挙げられます。

日本国外で日本語を学習する学生にとって、日本語話者との接触の機会は非常に少なく、教室で学んだ日本語をリアルな文脈で使う機会も限られています。これまで、日本語学習者から使用者へのシフトを実現するために、カンタベリー大学の日本語コースでは、クラス内でのFacebook groupへの投稿タスク、大学内の教員やクラスメートを対象としたショートビデオプロジェクトやインタビュープロジェクトを実施し、日本語プログラム内で公開してきました。しかし、そうした限定的な視聴者や読者を越えて、社会とのつながりを生み、社会に発信する活動の必要性を感じていました。そこで、日本語使用者へのシフトを促進し、学習者の主体性を育むことが期待できる「ときめき取材記」プロジェクトに取り組むことにしました。

◆クラス概要

授業名	Independent Course of Study（中級後半レベル）
期間	2019年2月～6月 前期12週間
時間数	週1コマ（50分）×12回　（週2回の計3時間の授業のうち2時間を講読に充当しており、本プロジェクトには週1時間を使用した。）
対象	10名

◆ねらい・目標

当該コースでは語彙、文法、文型の学習だけではなく、実際の場面で日本語を使うことを通して他者や社会とのつながりを作ることをねらいの一つとしています。インタビューの実施や記事を書くという日本語能力の向上とともに、計画づくり、話し合い、協働作業を通して、コミュニケーションスキル、analytical skillやcritical thinking skillを育むことも目標としています。また、「つながり」の多層性を意識し、①プロジェクトを一緒に行うクラスメートとつながり、②TJF担当者とビデオ会議やFacebookでつながり、③インタビュイーとつながり、

④成果物であるインタビュー記事を通して社会とつながることをめざしています。

◆授業の流れ

(1) 事前活動

インタビューの準備段階で、TJF担当者によるインタビューのコツや写真撮影についての特別講義をビデオ会議で行い、Facebook（非公開）で質問をしたり、フィードバックをいただくことで、つながりを深めていきます。

①「ときめき取材記」や「くりっくにっぽん」の「My Way Your Way」を読み、a. どの記事に興味を持ったのか、b. その記事のどこに惹かれたのか、c. それはなぜなのか、について話し合います。「内容」だけでなく、構成、表現の観点からも意見を交換します。

②2人1組のグループを作ります。グループごとにインタビュイー候補者の検討を開始し、候補者が決定したら、非公式にコンタクトをとります。

③クラスメート、担当教員、そしてTJF担当者に向けて、クラスのFacebookグループ（非公開）に自己紹介文などを投稿します。

④TJF担当者によるオンライン特別講義『インタビューの魅力、心構え、コツについて』を受講します。

⑤TJFの担当者に感想を書いてFacebookに投稿します。

(2) 企画書とインタビュイーへの質問作成

事前に相手についてよく調べ、特に、深い話を引き出すために、①なぜその人を選んだのか、②何を知りたいのか、③そのためにどのような質問を考えたのかに注意を払いながら企画書と質問を作成します。

(3) インタビュー実施まで

①TJF担当者によるオンライン特別講義『インタビュー記事にふさわしい写真の撮り方について』を受講し、写真撮影について学びます。その後、写真を撮りキャプションをつけてFacebookに投稿します

②クラス内の学生同士で模擬インタビューを2回実施します。

③インタビュイーに正式に依頼をします。

④インタビューを実施します。

(4) 原稿作成

①TJF担当者によるオンライン特別講義『記事のまとめ方について』を受講します。

②原稿にまとめて提出します。
③内容や構成を中心に担当教員のフィードバックをもらいます。
④フィードバックをもとに加筆修正をしていきます。（時間的な余裕がある場合は、記事として一定の質に達するまで修正とフィードバックを繰り返すことがあります）

（5）プロジェクト報告
①口頭発表「プロジェクトを通して学んだこと」（グループ発表）
②振り返りレポート「プロジェクトを通して学んだこと」（個人）

（6）成果物としての記事の公開
総合的な質が期待されるレベルに達した記事についてはTJF担当者のフィードバックを得て再加筆修正し、公開版を完成させます。

◆評価

評価（コース全体100％のうちの42％）については、ルーブリックを用いた評価と口頭発表などを含む以下の4項目を取り入れました。

①成果物（記事）	30%
②Facebookへの投稿（3回）	3%
③発表：最終発表（各グループ7–8分）	4%
④振り返りレポート	5%

◆成果

限られた期間内でのインタビュー依頼、インタビュー、記事執筆は、学生にとって決して簡単なタスクではありません。しかし、学生は熱心に取り組み、成人の日本人に日本語でインタビューを行い、試行錯誤しながらグループメンバーと協力して記事を仕上げていきました。学生の振り返りレポートにはチームワークと時間の管理の重要性を学んだり、インタビュイーだけが持っているストーリーを知ることができるインタビューのすばらしさを学んだりしたことが報告されています。

また、TJF担当者によるインタビューの心構えや記事の書き方についてのオンライン特別講義やFacebookでのやりとりが貴重な経験となったことも、振り返りリポートに報告されています。多くの学生に共通したコメントとして、インタビューの仕方や記事の書き方に加え、「協働作業を通してクラスメートのことをよりよく知ることができた」や、「チームワークと時間の管理の重要性について学んだ」ことなどが挙げられます。「ニュージーランドに移住してきた理由とその背景を知ることは、日本社会とニュージーランド社会について再考する機会と

なった」という報告もありました。

クライストチャーチの在留邦人数は約3,000人であり、さまざまな分野で活躍している日本人も少なくないはずです。しかし、コース期間中の限定された時間の中でインタビューの目的説明をし、承諾を得てインタビューが可能な人を見つけることは困難を伴いました。2019年度のインタビュイーの職業は、教育総合コンサルティングサービス経営者、寿司店経営者、日本食レストランオーナーシェフ、言語学者でした。

このプロジェクトのために顔を合わせることができるのは週1時間だったため、授業以外の時間にも作業を進める必要がありましたが、グループ全員が揃う時間を見つけることが難しく、作業の停滞を余儀なくされることもあったようです。海外の日本語学習環境ということもあり、成人の日本人と日本語で会話をする機会はほとんどないため、インタビューの本番では学生の多くが緊張したことも報告されています。

◆ウェブサイトに掲載された2019年度の記事

テーマ：ニュージーランドで暮らす

テーマ概要：総人口約487万人のニュージーランドにはさまざまな国から移住してきた人たちが暮らす。そのうち日本人は約21,000人（2017年）で、10年前と比べると7割増だ。どんな理由で移住してきたのか、どんな仕事をしているのか、話を聞いた。

記事タイトル	インタビュイー
ベリーサキモト！	清水聖二さん（シェフ・事業主）

◆課題

ウェブサイト上での公開の場を持つインタビュープロジェクトは、学習者主体、言語活動主体、学習環境デザインの観点から意義があると同時に、参加する教師の学びの場ともなります。TJFが作成した『外国語学習のめやす』の3領域（わかる、できる、つながる）と3能力（言語、文化、グローバル社会）を共通の評価の枠組みとすることで、日本国内外の複数の大学が参加していても、経験や問題点を共有し解決策を検討することが可能になりました。参加教師を対象とした勉強会では、学習プロジェクトの設計や、教師の内省と他者との共有を主眼とした実践の構造化と可視化などに焦点を当てており、教育機関や国を越えた学びの場となったといえます。多くの試行錯誤がありましたが、『外国語学習のめやす』と「めやす」の実践者との交流があったことで、勘や経験則に依存せず、自信を持って進めることができたと思います。その点で、担当教員である私にとってはこ

のプロジェクトへの参加自体が、つながりと越境、そして協働の場であったともいえます。

三代ほか（2017）は「多様化した実践がつながることで、一つ一つの実践もさらに発展・充実していくという循環を「ときめき取材記」をプラットフォームとすることで生み出していきたい」（p.17）と述べています。三代らがめざす「循環」を実現するための一部として本プロジェクトへ参加したことで、「わかる」「できる」「つながる」の3能力の育成を立体的につなげることができたと思います。今後は「ときめき取材記」をプラットフォームとした学生のつながりの場を、どのようにして、どのような学びに発展させていくかが課題の一つです。

参考文献

国際文化フォーラム（2012）『外国語学習のめやす2012―高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』国際文化フォーラム

三代純平・千葉美由紀・森亮介（2017）「ひととひと・ひとと社会をつなぐインタビュー実践の可能性　国際文化フォーラム「ときめき取材記」の試み」『言語文化教育研究学会 第3回年次大会 言語文化教育のポリティクス 予稿集』pp.12–17. http://alce.jp/annual/2016/proc.pdf

実践例⑤

義永美央子（大阪大学・2019年度）

◆キーワード

留学生、自律と協働、授業を越えた社会とのつながり、「心」を伝え合う

◆プロジェクト参加の動機

長らく担当していた初級のコース（大学院研究留学生の日本語予備教育）から、久々に学部生の上級クラスに担当が変更になり、授業のあり方を模索していた時に「ときめき取材記」プロジェクト（以下、ときめきプロジェクト）のことを知りました。実際に日本で生活し、活躍する人たちの生の声を聞くこと、そしてウェブサイトへの記事の掲載とそれを通じた情報発信をインタビューの目標とすることで、単なる日本語授業を超えた社会とのつながりを学生にも実感してもらえる点に大きな魅力を感じました。

◆クラス概要

授業名	専門日本語
期間	秋～冬学期（10月から2月の15週間）
時間数	週1コマ（90分）
対象	主に留学生。一部、英語コースに所属する日本人学生（帰国子女やインターナショナルスクール出身者）が含まれることもある。

◆ねらい・目標

シラバスには以下の4点を記載しています。

①学習を自律的に遂行するための目標や計画を考え、実行することができる。
②仲間と協力して課題を立案し、遂行することができる。
③他者と交渉し、意図や感情を伝えあうことができる。
④収集した情報をまとめ、適切に表現・発信することができる。

◆授業の流れ

(1) オリエンテーション（1コマ）
(2) インタビュー準備（4～5コマ）
①これまでの「ときめき取材記」を読む（最低三つ）
まず、「ときめき取材記」ウェブサイトに掲載された記事を各自が最低3本読み、読んだ中で一番いいと思った記事とその理由、記事の中で改善した方がいい

と思うところ、自分たちの記事はどういう工夫をすればよいと思うか、などをワークシート（資料④）に記入する宿題を出します。その後、ワークシートに書いたことに基づいてクラスで話し合い、「よい記事」とはどんなものか、自分たちはどういう点に注意して記事を執筆するとよいか、についての考えを共有します。

②テーマとグループ作り

a. 2017年度

プロジェクト開始1年目（2017年度）は、学生が1人ずつやりたいテーマを決めてプレゼンし、その中から支持する学生が最も多かった「自動販売機」に決定しました。しかし、インタビュイーがなかなか見つからないといった困難な局面に入ると、当初希望したテーマを選択できなかった学生を中心に、モチベーションが低下してしまうことがありました。また、どうしても協力してくださる方が見つからず、テーマを変えてインタビューを実施したグループもありました。

b. 2018年度

プロジェクト開始2年目（2018年度）には大阪北部地震や台風21号が発生し、多くの留学生が被害にあいました。そこで、クラスの共通テーマとして「防災」を設定した上で、その枠の中で具体的なサブテーマを学生が選択し、似たようなサブテーマに関心がある学生同士でグループを作る（仲間がいなくてもぜひ取り組みたいテーマがある学生は1人で実施も可）という形に変更しました。

c. 2019年度

プロジェクト開始3年目（2019年度）は「大阪の〇〇な人（〇〇には学生が好きなことばを入れる）」をテーマに、大阪にいる個性的な人物を読者に紹介するような記事を書くように促しました。その理由は、2年目までに実施した「自動販売機」「防災」というテーマでは、学生が聞きたい／インタビュイーが話したい内容が「人」というよりも、「コト」や「モノ」に偏ってしまう傾向がみられたからです。インタビュイーのことばを引き出し、その方の生き方や人となりを伝えることで文化を発信するという「ときめき取材記」の本来の趣旨を考えると、テーマそのものが「人」への注目を促すものであるほうがよいのではないかと考えました。また、2年目までの取り組みでは、遠方にお住まいの方にオンラインでインタビューする学生もいたのですが、特に母語ではない言語（日本語）を用いたインタビューを初めて経験する学生にとっては、直接対面してお話しできたほうがよいと考え、対象者を大阪在住の方に限定しました。

d. 2020年度

3年目の取り組みにはそれなりに手応えを感じましたが、4年目の2020年度は、想定外のコロナ禍に見舞われました。授業をオンライン（Zoom）で実施すること

になり、受講生の中には、来日が叶わず母国からオンライン授業を受けている学生もいました。また、入学してもほとんど大学に行くことがなく、このまま大学生活を続けることに意義を見いだせないという学生もいました。そんな中で、少しでも「大阪大学に入学してよかった」「私の選択は間違っていなかった」と実感してもらいたいと考え、2020年度は「大阪大学の○○な人」を共通テーマとして、大阪大学に縁がある人にインタビューをすることにしました。

③インタビューの方法を学ぶ

②で決めたテーマをもとにインタビューしたい方を決め、メールなどで依頼を行います。それと並行し、授業内ではインタビューの準備を進めます（資料⑤）。具体的には、まず、TJFから提供いただいた塩野米松さんの講義動画を視聴し、インタビューの方法を学びます。そして、テーマに関する情報収集、質問案作成、尋ねる順序（構成）の検討、メンバーの分担決定、日時や場所などの確認など、できるだけ具体的なシミュレーションをします。さらに、クラス内で模擬インタビューをしてみます（資料⑥）。

④写真の撮り方を学ぶ

実際に「ときめき取材記」ウェブサイトに掲載された記事の写真を見ながら、TJFから提供いただいた中西祐介さんの講演録（記事の写真に対してプロの写真家の視点からコメントしたもの：講演録そのものは非常に長いので、一部抜粋・編集しています）を読みます。最初にクラス全体で同じ記事へのコメントを読んだ後、各グループに一つずつ記事を割り当て、中西さんのコメントを参考にしながら、どう改善すれば良いかを他のグループに説明します。

（3）インタビューの実施（2～3コマ）

授業内でインタビュー実施に関する手順を確認し、録音データの文字化の方法、記事のまとめ方について教師が説明します。インタビューは授業時間外に、インタビュイーのご都合に合わせて日程を調整して実施します。インタビューの後には、なるべく早く（原則としてはインタビュー直後に）グループのメンバーで振り返る時間を取り、印象的だった／面白かったところ、意外／予想外だったところ、ぜひ他の人に伝えたいところ、聞けなかった／確認が必要なところを話し合うように伝えています。

録音したインタビューデータの文字化の一部は、授業内で実施します。文字化はgoogleドキュメントの音声入力を使って、シャドーイングの練習を兼ねてやってみることを推奨しています。

(4) インタビュー報告会（1～2コマ）

インタビュー実施後に、クラスで報告会を実施します。グループごとにパワーポイントを用いて、以下の4点を中心に発表します。

①インタビュイーのバックグラウンド（原稿のリード文の元になるもの）
②インタビューで聞いた内容
③原稿の構成案（アウトライン）と写真
④インタビューをして考えたこと（原稿のあとがきの元になるもの）

発表後には質疑応答の時間をとるとともに、コメントシートに発表の良かったところや記事執筆のためのアドバイスを記入し、学生間で相互評価を行います。

(5) 記事執筆（4～5コマ）

まずグループで執筆を進め、時間があればグループ間で原稿を交換して相互にコメントします。さらに、教師からのコメントに応じて修正します。このサイクルを何度か繰り返し、原稿が完成したところでインタビュイーに原稿の確認を依頼します。この段階で、インタビュイーにはウェブサイトへの掲載の許可もいただきます。インタビュイーから原稿の修正依頼があれば、それに応じて再修正を行います。

(6) 記事提出、振り返り（1コマ）

インタビュイーからOKを頂ければ、その原稿をTJFに提出します。ここまでを授業期間内に終了させることを目標にしていますが、場合によっては、授業期間後にも修正や確認のためのやりとりが続くこともあります。

最後の授業では、授業での目標の達成度、記事の完成度、グループ活動への貢献度などを振り返る時間を取り、グループの中で自分が果たした役割や、活動の良かった・面白かったところ、活動の難しかった・大変だったところを書いてもらいます（資料⑦）。また、以下の5つの観点から各10点満点での自己評価を行い、その根拠を記述するほか、自由記述として、授業への感想やコメントを書いてもらいます。

①よく準備して、インタビュー協力者の思いや経験を引き出すインタビューが実施できた。
②「ときめき取材記」の趣旨に合った記事が作成できた。
③読者の興味を引く記事が作成できた。
④グループのメンバーと協力して活動できた。

⑤グループの活動に貢献できた。

◆評価

①授業への参加（出席）：30%
②課題提出：10%
③報告会：20%
④記事執筆・振り返り：40%
という割合で成績を出しています。

◆成果

私が授業担当者として感じる成果やプロジェクトの利点は第1部に書きましたので、ここでは学生自身の声を、ウェブサイトに掲載された記事のあとがきからいくつか抜粋します（明らかな誤字は修正しましたが、その他は学生が書いたままを引用します）。

- 今回のインタビューは私にとっては大切な体験です。初めての取材として、外国人の皆さんと共に作業を進めてきたことはありがたいと思っています。私の国では、自販機を見たことがありますが、日本よりずっと少ないと思います。それで、私は、何故日本にはこんなに多いのか、また、これは日本の国民性につながりがあるのかという疑問を抱えてきました。今回、野村さんと話し合うことで、多様な自販機の存在と自販機の経営について多く教わり、自販機についてより興味深くなりました。
- このインタビューを通して日本の「おもてなし」文化をより深く理解できるようになった。相手の気持ちを考えながら行動するのは日本文化にはよく現れることだと思う。また、外国は日本に比べると個人主義文化と思われがちだが、ただ感情の表現の仕方が違うのだと吉戸さんが気づかせてくれた。また、日本文化の四季との関係が興味深いと思った。特に四季があまり感じられない沖縄でも四季が重視されることが面白い。日本のおもてなし文化や日本の習慣を知った上で、自分の生活の中にも取り入れたいと思う。
- 日本人の先生に日本で留学することをどう思うか直接聞くことができ、意味深い時間だった。私の留学についてのイメージと日本での留学についての考え方と大分違って驚いた。私は留学を考えるとき、その国の言語が最も重要だと思い、言語学習を目的に考えたり、これからその国が経済的に豊かな国になるかどうかを考える。しかし、日本ではあまり言語を学ぼうとする意識がなく、日本で進行されていない研究など日本ではできないことをやりたいという言語以外の確実な目標があって印象深かった。今回のインタビューは、私にとって留

学についてもう一回考えられる機会になった。

- 学校の隣で100年近く続くパン屋があることにとても驚きました。韓国ではそれほど長く続いている店がないので、タローパンの店長さんの色んなエピソードは私にとって特別でした。店長さんとお客さんの繋がりを感じて大阪の雰囲気が伝わってました。 店長さんは大阪弁がすごくて、聞いている間ずっと楽しかったです。すごくいい経験でした！

◆ウェブサイトに掲載された2019年度の記事一覧

テーマ：大阪のオモロイ人

テーマ概要：大阪は古くから商都として栄えてきました。また、食い倒れの町としても知られ、今も多くの観光客が訪れます。大阪城、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン、道頓堀など多くの観光地がありますが、それ以上に大阪の魅力となっているのが「人」です。大阪人のバイタリティや温かさを紹介したいと思います。

記事タイトル	インタビュイー
英語教育にもの申す	市本哲也さん（英語塾ABCの塾長）
お客さんも三代目：100年「長生き」のタローパン	堤洋一さん（タローパン店長）

◆課題

ときめき取材記は非常に面白いプロジェクトだと思いますが、インタビューをして記事にまとめる過程では毎年さまざまな課題が出てきます。私自身、まだいろいろな課題に迷ったり悩んだりしていますが、これまでの取り組みを通じて考えたことを少し書いてみます。

(1) テーマの設定

「授業の流れ」にも書いたように、どのようなテーマを設定するかは最も頭を悩ませる部分です。学生自身が聞きたいと思うことを中心に、しかし読者にとっての面白さや実現可能性ともバランスをとって決めていく必要があると思います。

(2) 教師としてどう関わるか、何を伝えるか

TJFが企画してくださった勉強会に参加した際に、聞き書きの名手である塩野米松さんと、スポーツ写真を中心に活躍するカメラマンの中西祐介さんが共通して「何よりも相手の人を知りたいと思う気持ちが大事」とおっしゃっていたことが非常に印象的でした。まず他者に関心を持ち、知りたい、理解したいと思う気持ちがあれば、聞き方や態度が自ずとそのようになり、相手も心を開いてくれる

ということだと思います。インタビューの聞き方やまとめ方といった技術的な点だけでなく、こうした「心」の部分を若い学生たちにどのように伝えていくかが、私にとって大きな課題です。

また、学生が何らかの壁（インタビューに協力をお願いしたがことごとく断られる、インタビューはできたがうまく整理してまとめられない、グループ間で意見の対立がある、など）にぶつかったときに、学生自身の解決する力を信じて待つのか、それとも教師がいつどのように口や手を出すのがその状況での最適解といえるのか、それについてもいつも迷いながら取り組んでいます。

(3) 協力者（インタビュイー）との関わり方

インタビューを実現するには、何よりもインタビュイーの方の協力が不可欠です。学生にはインタビュイーとのやりとりは誠実に行うように口酸っぱくして伝えていますが、うまく真意が伝わらず、不快な思いにさせることがあったかもしれません。また、最後の最後でインタビュイーと連絡がつかなくなり、ウェブサイトに掲載できないといったケースもありました。インタビュイーにいかにインタビューの趣旨を伝え、無理なく気持ちよく協力していただくか、といった点にも課題があると思います。

実践例⑥

上田安希子（東京国際大学・群馬県立女子大学・2017年度）

◆キーワード

留学生、共修、社会実践活動、日本事情、他機関との協働

◆プロジェクトに取り組んだ動機

私は、「ときめき取材記」プロジェクト（以下、ときめきプロジェクト）に初めて参加した2017年に、勤務していた複数の大学における授業の中でそれぞれに課題があると感じていました。

一つは、東京国際大学（2017年9月までの勤務校）の「現代日本事情Ⅰ」という授業です。この授業は、日本人学生と留学生の共修（協働）、日本人学生37名と留学生16名が、日本について調査探究し、わかったことを共有し合い理解を深めることが目的だったので、それまでは「テーマを決め、調べたことをまとめ、発表する」といったインタビュー調査、アンケート調査を含む活動を行っていました。しかし、そこでは以下のところに限界を感じていました。

①テーマに対するステレオタイプから逃れられない。
②日本人学生と留学生の関係性が対等になりにくい。

①については、クラス内の発表でとどまる場合、何のために調査を行いどこまで明らかにするのかという目的がはっきりしないため、自分たちがはじめから持っているステレオタイプの域を出ない結果に終わることが多いのです。②については、テーマの着眼点などは留学生の側から出てくることが多いものの、やはりテーマが「日本」で使用言語が「日本語」であるため、日本人学生が主導権を握る、留学生側が日本人学生に合わせてしまうといったケースが多々見受けられました。もっと何か、どちらの学生も共通して向き合うことができるチャレンジングな「課題」に対して、肩を並べて対等に取り組める活動ができないだろうか、という思いがありました。

もう一つは、群馬県立女子大学（2019年までの勤務校）の「日本語A・B」という中国・台湾からの交換留学生に対する日本語指導の授業でした。こちらでは、主にプレゼンテーションを中心とした表現能力とアカデミックな場面での「話す」能力を伸ばすことが授業の目的でしたが、3名～5名という少人数の留学生のみのクラスの授業では、次のような悩みがありました。

①教室内での練習にとどまり、社会での実践につながりにくい。

また、一方で、上級レベルの学習者なので、より実践的で、実際の社会で通用するような日本語の能力を伸ばしたいと思いながら、それまでの教室活動のみでは、次のような限界を感じていました。

②敬語、文体など知識としてはもう入っているが、教室の外での実践につながる能力を伸ばしにくい。

加えて、1年または半年という限られた留学期間で、教室の中での学習だけでなく、日本にいるからこそ得られる実際のつながりや、日本語を使って何かを成しえたという達成感を与えることができたら、という思いもありました。

そんな中、ときめきプロジェクトに出会い、このプロジェクトに参加することで、どちらの授業でも抱えている悩みを解決できる可能性があるのではないか、と考えました。前者の留学生と日本人学生共修の授業においても、じっくりと話を聞く形で「人」に迫り、その人のことばの中にある「日本」を見つけていくことでステレオタイプから逃れ、リアルな「日本」と向き合うことになります。それはどの学生にとっても「未知」で「リアル」な「課題」となり、メンバーの持つさまざまな持ち味を生かして協働で活動に挑むことが求められます。後者の少人数留学生クラスでも、記事作成のため外に出ていき、人と会い、「深い」インタビューを行うことで、教室の外の社会とつながることができるだけでなく、「ときめき取材記」ウェブサイトで発信する記事の作成を担うという形で、他機関の学生たちともつながることができる、そんな魅力を感じました。

◆クラス概要

（1）東京国際大学（以下TIU）

授業名	現代日本事情Ⅰ
期間	2017年4月～7月
時間数	90分×2コマを前半クオーター7回，後半クオーター7回の計14回
対象	53名（日本人学生37名・留学生16名）

※4～6名のグループで、かならず留学生を含むように調整

（2）群馬県立女子大学（以下GPWU）

授業名	日本語A・B
期間	2017年4月～7月
時間数	週1、90分×2コマ×14回（全28コマ）
対象	中国からの交換留学生3名（N1～N2取得の日本語専攻の大学院生、学部生）

◆ねらい・目標

二つの異なる機関の異なる授業で同じときめきプロジェクトに取り組むにあたり、以下の三つの共通の授業のねらいと目標を設定しました。

①インタビュー記事の作成を通して、自分たちが伝えたい・知りたい日本について知る。
②自分たちで主体的に、扱うテーマ、インタビューの相手、調査内容、記事の内容も話し合いを通して決め、記事を作成することができるようになる。
③記事をウェブサイトに公開するコンテンツとして完成させることを目的とするため、読み手の立場を意識しながらよりよい記事になるように協働し、わかりやすく伝える方法を学ぶ。

◆授業の流れ

ここでは、二つの授業に共通した部分を中心に、授業の流れを記していきます。

（1）事前活動（2.5～3コマ）

①インタビュー・プロジェクトの概要説明、評価と目標について

②ミニインタビュー体験「友人を紹介する」

A4用紙2枚程度に3枚の写真と文章でペアになったクラスメートを紹介する記事を作成します。その人の魅力を最大限に伝える工夫をしながら作成した記事をクラスのMoodleで公開し、お互いに読み合い、コメントし合うように伝えました（TIUのみ）。そこで、「いい記事」とはどういうものかを考えさせます。

③これまでの「ときめき取材記」を読む（最低三つ）

読んだ中で一番いいと思った記事と、その理由、記事の中で、改善した方がいいと思うところ、自分たちの記事はどういう工夫をすればよいと思うかなどをワークシートに記入してくることを宿題にし、それについてクラスで話し合わせました。ここでも、伝わりやすい記事を書くためにはどのような工夫をすればいいか、自分が記事を書くときに取り入れたいことなどを学びます。

（2）企画書の作成

①グループ分け・テーマ決め（1.5コマ）

インタビューを行うためのテーマを選びます。可能ならば、一つのテーマに対し複数のグループがインタビューに取り組むことでより理解が深まるようなテーマ設定を考えさせます。グループごとにインタビュイーの候補者まで考えてアイ

ディアを出すようにします。TJF担当者による「よりよいインタビューとは？」というゲスト講義も行い、プロジェクトに参加するという意識を高めてもらいました（TIUのみ）。

②企画プレゼン（TIUのみ）とテーマ・企画の決定、グループの再編成（TIUのみ）

TIUでは、各グループが出したテーマについてプレゼンを行い、投票でテーマを三つ（マスク、カフェ、結婚）選び、決定したテーマごとにグループを再編成しました。GPWUでは、TIUで決定したテーマを選んでも、自分たちで別のものを取り上げてもよいとして、検討させた結果、TIUで決まったテーマの一つ「カフェの役割」に参加することを決めました。

③インタビュイーの選定（1コマ）

プレゼンで提案されたものも含め、インタビューの相手をできるだけたくさん挙げ、その相手について調べます（マインドマップを描かせ、決まった三つのテーマから関連する事項をもっと探す→話を聞いてみたい人をそこから挙げる、というグループ作業をします）。決まったテーマ、調べたいこと、インタビュイー候補とその理由を決めて、企画書を書きます。ここまでの成果物としてグループごとにインタビューの企画書を提出させます。

（3）インタビュー

①依頼・アポ取り（依頼メールと電話併用）（1～2コマ）

インタビューの依頼文書を書き上げ、教師のチェックを受け、OKが出たらアポ取りに入ります。電話やメールなどで依頼をする場合も、一度依頼文書を書いておくと、それに沿って依頼することができるので、必ず書かせるようにしました。

②インタビュー事前調査・質問リストの作成

事前調査では、インタビューの相手について、テーマに関してインタビュー前に知っておくべきことを詳しく調べます。そしてインタビューで聞きたいことを質問文（正しい敬語にする）にして書き出します。このとき、質問は一問一答式に終わってしまうようなものでなく、その人の考えや人柄などが引き出せるようなものにするよう注意させます。予想される答えも考えさせ、それに対するさらなる質問まで考えておくように指示します。

③インタビュー実践

アポが取れたら実際にインタビューを行います。アポが取れたらすぐに、担当教師からも連絡を入れておくようにします。インタビューは、教師が立ち会わ

ず、学生のみで、主に課外活動として、先方の勤務先などを訪問して行います。録音や写真撮影についても必ず許可をもらってから行うこと、役割を分担して取り忘れがないようにすることを注意しておきます。

（4）記事作成

①文字起こし

記事にしたい部分を中心に、できるだけ文字化するように指示しています。留学生だけのグループにとっては、この作業は初めは大変なようですが、実際にやってみると深く理解でき、日本語の勉強にもなるのでやりがいがあると感じる活動なようです。TIUでは、文字起こし作業は均等に分担したのち、聞き取りが難しい箇所は、みんなで協力して聞くようにしていました（共修の場合の利点）。GPWUでは留学生のみのグループだったので、聞きにくい部分は教師がサポートするようにしました。

②原稿作成（3～5コマ）

記事をどのように構成すれば効果的に伝わるかを考え、原稿を書いていきます。自分たちが特に印象に残ったところはどこか話し合い、その箇所を中心に再構成します。このとき教師は、タイトル、インタビュイーの名前、小見出しをつけること、写真にも説明を加えることなど、例を見せながら伝えます。

（5）原稿の確認（2コマ）

①第1稿のチェック

完成した原稿はまず教師に提出し、チェックを受けます。教師は、わかりにくいところ、伝わりにくいところなどを指摘し、必要があれば文字起こし原稿や録音に戻って修正するように言います。

②TJFによるチェック

修正した原稿は再度TJF担当者によるチェックを受け、必要があれば修正します。ここで原稿を完成させます。

③インタビュイーに報告による内容確認

インタビュイーに完成した原稿を送り、承認が得られたらその原稿をTJFに送ります。TJFがインタビュイーに承諾を得た後、ウェブサイトに掲載となります。

◆評価

最初のオリエンテーションで、ときめきプロジェクトに参加する活動の目的と

ねらい、どのようなことを学び、できるようになることをめざすかをルーブリックにして示しました。活動終了後にレポートで「どのようなことを学んだか」を記述させる中で、自己評価をさせました。記事や企画書の提出、授業への参加度も評価しました。

◆成果

(1) 学生の学び

まず、留学生にとって、日本語学習の観点からみると、「教科書では学ぶことのできない日本語の語彙や表現、発音について学ぶことができる」という成果があるといえます。実際のインタビューを書き起こす過程で、インタビュイーの自然な発話に触れることは、かなり上級の学習者であってもなかなかない貴重な経験となります。また、記事を作成する活動の中で、留学生と日本人学生の共修の授業の場合、留学生は日本語母語話者が産出したり理解したりする日本語を共有することで学びが深まる一方、日本語母語話者は、留学生にわかるように伝える工夫をしたり、自身の産出する日本語を見直すきっかけをもつことができます。記事を完成させる過程での留学生との対話の中で、日本人学生は、自分たちが当たり前だと思っていた日本の文化や社会の一面に気づかされるという学びも得られます。

学生たちのレポートに書かれた感想の一部を紹介します。

- インタビューを通して今まで出会ったことのない人と会い、話をして視野が広がった／刺激を受けた／将来を考えるきっかけになった。
- グループでの協働を通して、仲間と協力すること、話し合うことの難しさや大切さを学んだ。
- 文化やものの考え方の違いを知った。
- 仲間といい関係が築けた／信頼が生まれた。
- 「取材」の大変さを理解した／人と対話するときに気をつけるべきことを学んだ。

(2) 教師からみた活動の意義

このプロジェクトの意義をまとめると、以下の四つが挙げられます。

①実際に社会で活躍する人たちに会いに行き話を聞くという普段はなかなかできない機会を得られること。
②記事として公開される可能性があるという「責任」が生まれ、さらに高いレベルのものをめざそうとすること。
③本当の意味での「協働」が自然発生的に生まれ、促進されること。

④真の「社会実践活動」となっていること。

ときめきプロジェクト参加前の授業の中で行ってきたインタビューでは、インタビューの対象が学内の人や知人、友人に限られてしまうところがありました。しかし、このプロジェクトへ参加することで、ウェブサイトに掲載する記事を書き、それが掲載されるという事実と、支援してくれるTJFという後ろ盾を得て、「依頼しやすい相手」でなく「ほんとうに話を聞きたい人」に依頼をすることができるようになります。

また、記事として公開される可能性があるという「責任」が生まれ、これまでの教室内での共有で終わる授業でめざしていたより高いレベルのものを当然学生たちはめざそうとします。授業の発表で聴衆に理解してもらうことと、予備知識のない読者にも伝わるように記事を書くことは明らかに違うからです。また、ウェブサイトに掲載されるため、TJF側からのプロフェッショナルな指摘も受けることになり、社会で通用する文章を書くとはどういうことかも学生は学ぶことができるのです。

これまでの授業の中でも、私自身「協働」を促す学習活動を模索してきましたが、このプロジェクトは、ひとりで進めることがなかなか難しいため、自然発生的にグループの仲間が「協働」し、意見交換をし、学びあっていくことになります。文化的、社会的背景も知識も考え方も異なるメンバーが、互いにできることを持ち寄ることで、よりよい記事を作り上げようとするのです。また、本稿の実践例のように、二つの違う大学の違う授業の履修者が、同じプロジェクトに参加し、同じウェブサイトに並んで記事が掲載されることで、お互いに刺激を受けあい、間接的にではあってもそこに「協働」が生まれるという点も注目すべき利点です。

GPWUでの実践がそうであったように、この活動によって、教室の外の社会とつながる機会を得られます。それだけでなく、インタビュイーの声をウェブサイトを通じて社会に発信する記事を作るという行為は、授業のための活動ではなく、まさにそれ自体が社会実践になっています。日本人学生、留学生ともに、このプロジェクトに関わることで、日本語を使って実社会で何かを成し得たという達成感を得ることにより、自分自身についても社会についても考えを深めることになります。

◆ウェブサイトに掲載された2017年度の記事一覧

テーマ①：マスクの秘密

テーマ概要：

トルコの留学生から投げかけられた疑問――なぜ日本ではマスクをしている人

が多いのか。確かに日本では日常的にマスクをしている人が多い。一方、日本以外の多くの国ではマスク＝病気という認識があるらしい。私たちが考える使い方だけでなく、マスクのいろいろなメリットを知りたいと思い、マスクの研究者や開発者に話を聞きました。

機関	記事タイトル	インタビュイー
TIU	マスクの知られざる秘密	飯田裕貴子さん（マスク研究家）
TIU	ウイルスと闘う	谷津一義さん（日本バイリーン株式会社　経営企画部） 向光晴さん（日本バイリーン株式会社　生活資材営業部）

テーマ②：カフェの役割

テーマ②概要：日本ではどこにいってもカフェがある。人が集まってお茶を飲むためだけでなく、最近はさまざまなテーマをもったカフェが増えてきた。カフェは人びとにとってどのような存在なのかをさぐった。

機関	記事タイトル	インタビュイー
GPWU	違うことしかやらない	町田博美さん（高崎　猫カフェ「Cat's Planet」オーナー）

その他、けん玉カフェ、足湯カフェ、ふくろうカフェなどさまざまなカフェの方にインタビューをしましたが、残念ながら掲載には至りませんでした。また、三つめのテーマ「結婚」でも、結婚式場の方やカメラマン、旅行会社、神社の方などにインタビューしましたが、こちらも掲載には至りませんでした。

◆課題

今回の実践における課題としては、次のようなものが挙げられます。

①負担が大きい活動ではあるので、やる気があまりなく積極的に取り組まない学生にとっては、十分な学習効果が得られない。
②グループでのコミュニケーションが不得意だったり、意見が全くでない学生が一歩も進めなかったりということがあり、サポートがかなり必要な場合が多い。
③人数がかなり多いクラスの場合、グループによってはそのサポートが十分にできず、活動が深まらない場合もある。

負担が大きいという点については、その反面やり終えた時の達成感の大きさ、得られるもの大きさを強調し伝えた上で、それでもやりたいと思う学生を募ると

いう工夫が必要だと言えるでしょう。活動には複雑な部分もあるので、それについては例などを示して、イメージをつかみやすくする（すでに公開されている記事が良い手本となる）などの工夫が教師に求められます。また、このプロジェクトは、同時に他の機関で実践している人たちとの情報交換や、TJFの担当者から他機関の実践を聞くことで、さまざまなヒントを得るられることが最大の利点でもあるので、それを大いに活用することで改善できることもあります。より多くの機関でさまざまな実践が行われ、そこで起きた問題をどう解決したか、また実践して効果が高かった方法などを実践者間で共有していくことで、実践者同士の協働もまた促されていき、この活動はもっと学びの多いものになっていくでしょう。

実践例⑦

濵田典子（秋田大学・2019 ～ 22年度）

◆キーワード

Web雑誌作成プロジェクト・役割・責任

◆プロジェクトに取り込んだ動機

私は、大学で、2019年度以降、他者にインタビューを行い、その言葉を他の誰かに届けるという行為を基軸に置いたプロジェクトを行っています。これをすることを決めたきっかけは二つあります。一つは、学生たちが将来に対する漠然とした不安を抱いていることを知ったことでした。ある授業の中で、「将来何がしたいかわからず、不安」「日本語を専攻するということを自分で選択したわけではないため、日本語を勉強する意義が見つけられない」「自分はつまらない人間で、なぜ生きているのかわからない」と話す学生が少なからずいることを知りました。

もう一つは、学生たちが「日本にいるからこそ学べる日本語の授業を受けたい」という希望を持っていたことです。

このような状況を踏まえ、実践校がある県内で活躍している人に対して、その人の仕事をテーマに日本語でインタビューを行い、そこで得られた語りを雑誌記事にまとめ、読み手に届けるプロジェクトを実施することにしました。このプロジェクトを通して、日本語の文章表現能力を高めることに加え、①学生が普段の留学生活では出会いにくい人と出会い、その人から生き方や考え方を学ぶ機会を得ること、②他者との関わりの中で言語を使用し、その行為の中で他者に貢献できる部分が自分にもあることに気づき、それによって、学生の希望も叶えながら不安や悩みの解決の緒を示すことが可能になると考えました。

ときめき取材記ウェブサイトへの掲載は、雑誌記事を書き上げた後、さらに外へ自身の記事を発信してみたいと思う学生に薦めました。

◆クラスの概要

授業名　日本語5 - I（2019年度、2020年度、2021年度、2022年度）

学生数　3名～ 6名（年度によって異なる）

授業時間数　90分× 16回

＊本授業の位置づけは、本学のプレースメントテストで最も日本語能力が高いクラスに配置された学生に対して、文章表現能力の向上を目指したものである。

◆ねらい・目標

①洗練された文章を書くために必要な点を理解する。
②生き方や考え方に関する視野を広げる。
③自分の言語行為が周りの環境に影響していることを知る。

言語形式に関する到達目標は、プロジェクトを支える言語能力をCEFRの能力記述文を参考に設定し、それをコースデザイン及び授業案作成の際に参照するようにしました。能力記述文の設定手順は、まず、本プロジェクトを支える主要な言語行為がインタビューと記事作成であったことから、この二つに関する「活動Can-do」を抽出し、設定しました。次に、これらの活動を支える具体的な言語能力を検討するために、この活動に関する「方略Can-do」と「能力Can-do」の能力記述文を吟味した上で設定しました。

実際に設定した能力記述文は表1の通りです。なお、記事作成に重要な表現技法に関する能力記述文は、適切なものが見つからなかったため、自作しています。

表1　言語形式に関する目標

言語行為	Can-do種類	能力記述文
インタビュー	活動	相手の興味深い返答を取り上げ、用意した質問を自発的に変えるなどして、さらに興味深い答えを引き出すことができる。（CEFR B2 インタビューを行う）
	能力・方略	上手に発言権をとって、会話を始め、続け、終えることができる。（CEFR B2 発言権をとる） 相手の発言を正しく理解したかどうかを確認するための質問ができ、あいまいな点の説明を求めることができる。（CEFR B2 説明を求める） 礼儀正しい言葉遣いで、自分自身の述べたいことを自信を持って言うことができる。（CEFR B2 社会言語的な適切さ）
記事作成	活動	実際、もしくは想像上の出来事や経験について、複数の見解を相互に関連づけ、当該のジャンルの書記習慣に従って、明瞭かつ詳細に記述文を書くことができる。（CEFR B2.2 作文を書く）
	能力・方略	論拠となる詳細関連事項や具体例などによって主要な論点を補強して、明快な描写や語りをすることができる。（CEFR B2 話題の展開） 複数の考えの間の関係を明確にするために、さまざまな結合語を効果的に使うことができる。（CEFR B2 一貫性と結束生） 倒置や体言止めなどレトリックを用いながら、洗練された文章を書くことができる。（自作 洗練された表現）

日本語訳は吉島・大橋（2008）

◆授業の流れ（授業スケジュールは表2の通り）

（1）第2回から第6回：練習フェーズ　クラスメイトの紹介記事を書く

目的：インタビュー雑誌作成プロジェクトで実際に行うことを体験しながら、インタビュー及び文章作成の注意点などについて学ぶ。

内容：クラスメイトが自分で書いた自己紹介文を読んだ上で、質問作りを行い、20分程度インタビューを行った後、発話データを書き起こし、それを元に記事を作成する。

①質問作り

単に質問するだけでなく、相手が話しやすいように自分の話もする必要があることや、どのような質問をどのような順番で行えば相手が答えやすいかを考えることを導入する。

②記事作成

読みやすさを考慮し、冗長な点や言い間違い、提示順序等を変更することはあっても、基本的にはインタビュイーの言葉を変更してはいけないことを確認する。インタビュー記事の前に、インタビュイーを紹介する中表紙を作ること、読みやすさのために記事に章を設定するよう指示する。

③振り返り

記事作成後、お互いのものを読みあってから、インタビューや記事作成で困ったことやうまくできなかったこと、本番フェーズで気をつけたいことを報告させる。

④その他

練習フェーズの活動と並行して、教師と相談しながら第2回から第4回の間にインタビュイーの候補を決定する。

表2　授業スケジュール

回	授業内容	フェーズ
1	オリエンテーション	練習フェーズ
2	質問作り	
3	インタビュー	
4	記事作成①	
5	記事作成②	
6	練習フェーズに関するフィードバック	
7	インタビュイーについて発表	本番フェーズ
8	質問作り①	
9	質問作り②	
10	インタビュー観察	
11	インタビュー（各自）	
12	記事作成①	
13	記事作成②	
14	雑誌タイトルを作成	
15	発表・編集後記作成	
16	雑誌表紙の検討会・振り返り	

（2）第7回から第15回：インタビュー雑誌作成プロジェクト（本番フェーズ）

①インタビュイーについての発表

自分の役割が「インタビュイーの言葉を社会に発信する仲介者」であるということが意識できるように、a. インタビュイーの略歴、b. なぜ自分がこの人にインタビューをする必要があるのか（個人的動機）、c. なぜこの人の言葉を他の人に伝える必要があるのか（社会的意味）、d. どのようなことを聞いて

みたいのかについてクラスメイトに向けて発表する。

例えば、カフェ併設のダンス教室を行っている方にインタビューをすることにした学生は、個人的動機として自分自身が以前ダンスを勉強していて、ダンスが好きだということをあげ、社会的意義として、「お金になりにくい」と思われている仕事を諦めなかった人の言葉を読者に届けたいと話していました。

②質問づくり（第8回と第9回）

練習フェーズで学生がインタビューを行う際に見られた、追質問ができていないという問題点を再度確認し、質問を作成する。

具体的には、質問を100個作ってから、より重要な質問に絞るよう指示しました。100個質問を挙げることを通して、インタビュイーに関する情報の収集・整理をすることや、一度書き出した質問を縁にインタビュー中に追質問を浮かびやすくなることを狙いました。

③インタビュー観察（第10回）

授業担当者が行ったインタビューを題材に、インタビューを実施する目的や録音許可の確認を行うための事情説明や録音方法を確認する。

④インタビュー（第11回）

授業外に各自インタビューを実施。実施後は期日までに書き起こし、音声データと書き起こしファイルを提出するよう指示する。

インタビューの日時と場所はインタビュイーと相談し、決定しました。実際に会うことができた年度では、喫茶店や公共の場所で、会えない年度では、Zoomでインタビューを実施するよう指示をしました。

⑤記事作成（第12回と第13回）

初年度はインタビュアーの質問が見える記事を作成、2020年以降は聞き書きの記事を作成する。

作成にあたって、練習フェーズで導入した、読みやすさの考慮や、インタビュイーの言葉を変更してはいけないことを確認しました。これに加えて、中表紙や章タイトルは読み手の心を掴むことが重要であり、そのために使える表現技法（繰り返し、省略、メタファー、倒置、空白記号など）を紹介し、自分の記事に取り入れるよう指示しました。記事作成中には、お互いの記事を読み合い、わかりにくい部分を指摘しあったり、表現技法の相談をしたりする時間も設けました。

⑥雑誌名の決定（第14回）

雑誌を通して自分たちが伝えたいメッセージは何なのかを検討し、雑誌名を検討、決定する。

⑦記事に対する思いの発表、編集後記の作成（第15回）

インタビューを通じて学んだことを学生自身に言語化するために、以下4点（a～d）を中心に記事に対する思いを発表し、それをもとに編集後記を作成する。

a. インタビュイーのごく簡単な紹介

b. インタビュイーの言葉の中で、絶対に他の人に伝えたいと思った言葉

c. 今の自分に一番響いた言葉

d. プロジェクトを通して自分が得たもの／わかったこと／葛藤など

（3）第16回：本授業の振り返りやアンケートの実施

授業終了後、授業担当者が最終校正を行い、Web雑誌としてアップロードを行いました。また、紙媒体として学生と授業担当者、インタビュー相手に各1部と予備5部を発行しました。2019年度は4名の学生がインタビュイーに直接雑誌を持っていき、予備を大学や近隣のカフェに置いてもらっています。また、2021年度以降は、希望者に「ときめき取材記」に応募してみることを伝えています。その結果、これまで4名の学生が応募し、記事が採用されています。

なお、学生が各活動で事例として参照できるように、教師はいずれの年も第7回から第15回に学生が行う活動と全く同じことを学生より先行して行っています。

◆評価

授業参加度（30%）、クラスメイトの紹介記事（30%）、インタビュー記事（40%）で自己評価・他者評価・教師評価を行いました。

記事に関する評価を行うにあたり、学生たちと「よい記事とは何か」について話し合い、ルーブリックを作成しました。それを用いて、自己評価・他者評価・教師評価を行いました。

◆成果

日本語母語話者の発話を日本語学習者である学生が何度も聞いて書き起こし、記事として仕上げるという非常に困難な作業を課すプロジェクトです。しかし、学生たちは大変だと言いながらも「徹夜した！」「20時間以上録音を聞いた」と誇らしそうに話す様子が見られました。

この授業における学生たちのモチベーションは非常に高かったです。もちろん、学生数が少なく教師が一人ひとりに対して丁寧な指導ができたことや、挑戦することに自ら意義を見出すことができる学生が集まっていた可能性も、その要因として考えられます。ただ、授業中の学生の様子や成果物を見ていると、インタビューの中で自分が学んだことを記事にして他者へ伝えようとする行為の構造そのものが、モチベーションの高さを維持することに大きく影響していたと、私は考えています。

インタビュー雑誌作成プロジェクトにおける言語使用は「世界を自分と関連づける行為」（van Lier 2001）になっています。van Lier（2001）は、生態学的アプローチの立場から、言語使用が世界と自分とを関連づける行為であるためには、単に他者や世間一般に向けて情報を伝達するのではなく、自分が誰なのかということや、自分の言語行為の先に存在する読み手や聞き手の存在を行為者が認識していることが必要であると主張しています。

学生たちは、「自分が誰なのか」ということについて、自分自身がインタビュイーから言葉を預かり、それを読者へ伝えるという役割を担う者であるという認識を強く持っていました。ある学生は、本実践に対する印象について、「授業というよりも、全員が一つのグループとして一つの目標だけを目指し、それのためだけに努力しているという雑誌の会社を作ったみたいだった」「先生は「教師」ではないです。上司みたい。私達も「学生さん」ではなく、会社で働くやる気いっぱいの新人さんでした」と述べていました。

國分・熊谷（2020）は、責任とは、ある行為に関する意思があるかどうかを確認するようにして、人に負わせるようなものではなく、応答性のあるもの（responsibility）であり、なるもの（becoming）という性質を持つと述べています。つまり、責任ある役割を引き受け、その役割を全うしようとする中で（responsibility）、責任を持つ人になっていく（becoming）ということです。この言説を踏まえると、学生が担ったインタビュー記事の執筆者という役割には、教室活動ではあるものの、その行動に伴う責任が付随されていると言えます。そして、この責任が付随された役割を全うしようという学生の応答が、高いモチベーションを持ってプロジェクトに参加し続けることに繋がったのではないでしょうか。

また、本実践は学生1人が1人のインタビュイーの言葉を預かり、記事を書くという個人での活動が主軸となっているため、「他者のために言葉を使う」という性質が学生に前景化されやすい構造を持っていました。学生は自分がこの人の言葉を仲介するただ1人の人間であることをより強く認識することとなり、最後まで役割を全うすることに繋がったように思っています。

プロジェクトで得た、新たな言語形式に加え、行動することで味わった想いを教室の外にも繋げてほしいと考えています。

◆ウェブサイトに掲載された記事一覧

ときめき取材記ウェブサイトへの記事掲載が決定した学生は、より広く自分の記事が読まれること、それを通してインタビュイーの素晴らしさをいろいろな方に伝えることができることを喜んでいました。イシさんの記事（「諦めずに進んだ先に見つけたもの」）はオーストラリアの子どもたちの日本語教材にも採用されています。日本語教師を目指している彼女にとって、自分の作品が日本語教育に使われる事は、これからの夢に向かうモチベーションにもなったようでした。広いネットワークを持つときめき取材記に掲載していただけたことは、言葉を使用することで誰かに影響を与えるという実感をさらに広げることができたと感じています。

年度	記事タイトル	インタビュイー
2021	私の人生は自分で選択した結果が繋がってできている	Yummiさん（アーティスト）
	死ぬまで天ぷらをやり続けたい	松岡叡美さん（株式会社せん）
2020	あきた舞妓を支える仕事：進化する花柳界	北嶋大地さん（秋田天ぷらみかわ大将）
	諦めずに進んだ先に見つけたもの	牟庸鍾さん（韓国語教室運営）

◆課題

今後は、学生が読み手と接触する経験ができる機会を作りたいと考えています。黒田（2014）は、地域とかかわる実践には、授業を受けることで直接学びを得る学生（第1受益者）と、学生と直接やりとりすることによって学びを得る者（第2受益者）だけでなく、その学びを間接的に受け取る存在（間接的受益者）がいると述べています。

本実践で言えば、第2受益者はインタビュイーであり、間接的受益者は雑誌の読者や雑誌を置いてくれる場の提供者となります。作成した雑誌を学生が地域のカフェ等に持っていき事情説明等を自ら行うなど、第1受益者である学生が間接的受益者と直接関われるような活動を取り入れることで、学生は自分の言語行為が社会に繋がっていくことをより実感できると考えています。

参考文献

黒田類（2014）「地域国際化交流協会における日本語研修実施の社会的意義とコーディネーターの役割」『多言語多文化―実践と研究』6, pp.4-22.

國分巧一郎・熊谷晋一郎（2020）『〈責任〉の生成―中動態と当事者研究』新曜社

Council of Europe（2008）『外国語の学習、授業、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』初版2刷（吉島茂・大橋理枝 訳）朝日出版社

van Lier, Leo. (2006). *The Ecology and Semiotics of Language Learning: A Sociocultural Perspective*. Berlin: Springer.

実践例⑧

村田晶子（法政大学・2020 ～ 21年度）

◆キーワード

多文化教育、国内学生、フィールドワーク、質的調査法

◆プロジェクト参加の動機

私は大学で「多文化教育」というクラスを担当しており、クラスのプロジェクトの選択肢の一つとして、ときめきプロジェクトに学生が毎年参加させていただいています。ときめきプロジェクトの多くは、留学生を対象とした日本語クラス、日本事情クラスでの実践ですが、私のクラスは、日本で生まれ育った学生（国内学生）が大半を占めるクラスで、クラスの目標も日本語クラス、日本事情クラスとは異なります。ここではまずクラスについて紹介したあとで、プロジェクトの参加の動機について述べます。

多文化教育のクラスの目標は、大学の学部生（2年生～4年生）が多様な言語文化的な背景をもつ人々と交流することを通じて、社会文化の多様性、協働の重要性を学ぶこと、そして、多様な他者のために自分に何ができるのかを考え、主体的に行動する力を身につけることです。クラスは、春学期と秋学期の通年で実施しており、春学期は異文化間交流の理論、日本に住む外国籍の人々、外国にルーツをもつ人々が抱える課題について学ぶとともに、グローバル人材、英語神話、やさしい日本語、ステレオタイプ、日本人論、ハーフ、ヘイトスピーチ、ヘイトクライム、マイクロアグレッション、マジョリティー特権、エポケーなどの言葉や概念を事例とディスカッションを通じて考えていきます。そして、秋学期は、そうしたことを踏まえたうえで、国際交流プロジェクトに参加します（学内の留学生との交流と学習支援、海外大学とのオンライン国際協働学習など（村田2018, 2022））。

ときめきプロジェクトに学生を参加させていただくようになったきっかけは、2020年のコロナ禍の状況にあります。それまで行っていた対面での国際交流プロジェクトの実施が難しくなり、プロジェクトの幅を広げ、学生たちが学外の人々（多文化共生に関わっている社会人）を取材し、その記事を発信するようなプロジェクトを始めたいと考えていた折に、ときめきプロジェクトの存在を知り、参加させていただくことになりました。

もともと多文化教育のクラスは、所属大学のキャリアデザイン学部の体験型選択必修科目群の一つとして始められたものです。体験型選択必修科目群の目標は、多様な現場の人と関わり、インターンやボランティア活動など、学生が体験的な活動を行なうなかで、将来、労働世界に出ていくことを視野に入れながら、

「主体的に考え生きる力」を育むことです。こうした体験学習の考え方と、ときめきプロジェクトは親和性が高いと思います。ときめきプロジェクトは、学生たちが面識のない相手に連絡して取材許可を取るところから始まり、インタビューイーとの関係性を築きながら、インタビューを進めていくことが求められます。また、インタビュー後に記事をまとめる際も、記事の読者を念頭におきながら、自分が何を伝えたいのかを考えて、まとめていく力が必要になります。加えて、最終原稿をインタビューイーに確認してもらい、正式な記事掲載の承諾を得ること、そして、国際文化フォーラムの審査を受け、承認を得たうえで掲載に至る、という一連の社会的なプロセスを経験することで、学生たちは多様な人びとと関わりながら、記事を完成させ、対外的に発信していくことの重みを実感します。こうした経験は、学生たちの主体的な行動力、責任感、考える力、協働する力を涵養するために役立つと考え、ときめきプロジェクトに学生を参加させていただくことになりました。

◆クラス概要

以下が秋学期の多文化教育の授業の概要です。

授業名	多文化教育
期間	2020, 2021秋学期
授業	授業は様々なボランティア活動の準備、実施報告、振り返りで構成される。ボランティア活動は、全員参加のものと選択式のものに分かれる。 【ボランティア活動】 ①全員参加のプロジェクト 　学内の留学生との国際交流、学習支援プロジェクト ②選択式のプロジェクト 　A）海外大学の学生との国際協働 　B）日本語クラスの授業支援ボランティア 　**C）ときめき取材班** 　**（多文化共生に貢献する人々の取材と記事発信）**
授業のコマ数	１コマ（100分）×14回（プロジェクト別のチュートリアルがメインで、ときめき取材班のチュートリアルは３コマ）
対象	大学の学部生（２～４年生） 2020年、2021年　各44名 ときめきプロジェクトを選択した学生数： ・2020年６名（国内学生３人、留学生３人） ・2021年５名（国内学生５人）

◆ねらい・目標

多文化教育のクラス全体の目標は次の３点です。

①多様な背景をもつ人びとと関わり、連携する力を高める。
②体験したことを振り返り、次に生かす力を高める。

③多文化共生社会を創っていくための主体的行動力を向上させる。

これに加えて、ときめきプロジェクトでは、

④質的調査法の基礎を身につけ、勉学や研究に生かす。
⑤記事作成を通じて文章作成力を向上させる。

という点も目標として掲げています。④の質的調査法に関しては、私は文化人類学が専門で大学ではフィールドワーク（質的調査法）の教育を行っている関係で（村田晶子・箕曲在弘・佐藤慎司2022）、ときめきプロジェクトでも指導に取り入れています（テーマ選び、問いの立て方、インタビューの準備、文字化の注意点、データのまとめ方など）。また、ほとんどの学生が取材記事を書いて発信した経験がないことから、⑤に挙げたような、読み手を意識した文章作成力を高めることも目標に掲げています。

◆授業の流れ（ときめき取材班の活動の流れ）

ときめきプロジェクトは、基本的に各学生が個別に行う活動として設定しています（過去にグループで取材を行ったケースは1組のみ）。テーマは学生が決めますが、多文化教育のクラス全体の目的と関連した共通テーマとして「境界線を越えて協働する」人々を取材するように指示しています。プロジェクトは、私が作成したハンドアウトとワークシート（村田2022を参照）をもとに学生たちが個別に進めていき、準備、実施、記事作成の各段階で、取材を行っている学生達を集めてグループ・チュートリアルを行い、進捗状況の報告や記事についてのディスカッションを行います。

段階	学生の活動	教員の指導、グループ・チュートリアル
①準備	a. 企画書の作成とテーマ選び b. インタビュー準備	・グループ・チュートリアルで、各学生の選んだテーマ、インタビューの質問リストについてディスカッションを行う。
②実施	インタビューの実施	・グループ・チュートリアルで各学生が取材の進捗状況を報告する。また、進捗状況をGoogle Spreadsheetに毎週記入する。アポが取れない学生、取材が遅れている学生には教員が適宜アドバイスをする。
③記事作成	a. 文字化 b. 記事作成 c. 修正、校正、提出	・グループ・チュートリアルで記事を読みあい、おたがいにコメントする。
④振り返り	a. クラスでの報告会 b. 最終報告書の作成	・各学生が、学期末に取材についてクラス全体に報告し、クラスメートから質問やコメントを受ける。 ・各学生が最終報告書（取材の振り返り記録）を提出し、教員からコメントをもらう。

◆評価

ときめきプロジェクトの評価は、学生の参加度（チュートリアル、進捗状況報告）、そして、最終成果物（記事）の質と量から総合的に評価します。

◆成果

多文化教育のクラスは、前述した通り、体験学習を重視するクラスです。体験学習で大切なことは、参加者が体験するだけでなく、体験したことを振り返り、何ができて、何ができなかったのか明らかにし、改善していく力を身につけることにあります。そして、体験、省察、応用のサイクルを繰り返すことで、彼らが自分自身の変化や成長を感じ、今後の人生の糧にしていくことです。

以下、ときめき取材班の成果として、学生が何を感じ、何を学び取ったのか、彼らの声を挙げておきます。

【2021年参加の学生たちの振り返りから】

〔インタビュイーとの対話〕

- インタビュー前に質問項目を考えておいたものの、他の話題で会話が盛り上がることや、話を掘り下げるべき話題を見極めることが難しかった。そのため序盤は一つの質問に対して時間を使いすぎてしまったが、後半のインタビューでは自分が読者に伝えたいことの軸を意識するようにした。相手が何度も同じキーワードを口にしていた時はその話を掘り下げるようにした。

〔読者との対話〕

- 記事にする時、どのような構成にすれば読者に伝えたいことが伝わりやすいか、考えることに苦労した。→記事内のトピックの分け方が重要だと感じた。文字化をそのまま記事にするだけでは伝わりにくいため、トピックの分け方や話題の組み合わせを意識した。
- 記事を書くことを通して、「何を伝えたいのか」という軸をぶらさずに文章にすることの難しさを学んだ。用いるキーワードや表現によって読者への伝わり方が違うのだと学ぶことが出来た。これを意識することで、「伝えたいこと」の軸をぶらさないようにすることができるのだと思った。

〔社会人に取材することを通じた学び〕

最初私は、「自分のような学生を相手にしてくれる人は少ないだろう」という自らの思い込みから、アポイントを取る人もあまり有名では無い人を選ぼうとしていた。しかし、それは挑戦心がない＆自分の思い込みに過ぎない。それに気付いて、ダメ元でもアポイントを掛けてみたら、今からドンドン繁盛してくるような

方で自分が興味のある方にインタビューを行うことが出来た。インタビューは夢のような時間で、自分は経験した事ない人生を聴けて面白かったと同時に、このような考え方があるのかと今後の生き方の参考にもなった。

〔記事を発信することの喜び〕
「記事にする」事は、自分の学びを改めてアウトプット出来て、自分の学びを深められるだけでなく、色々な人にも見てもらえるため、他の人にも新たな発見を与えるきっかけを作ることができる。このように、自分のためだけでなく、他の人の支援や参考にも出来るところに、今回を通して記事を書く楽しさを知った。大変ではあったが、同時に達成感もとてもある。ここで終わりにせず、自分でも個人的に今後も企画してみたいと感じた。

〔今後にどう生かすか〕
- 「積極的な活動を目に見える形に残しながら傾聴力を高められる」人間になる。これまで私は、色々な活動を個人的にしてきたものの、ほぼ目に見える成果として現れるものがなかった。結果が全てだとは思わないが、自分のした活動を折角なら、目に残る形で「世の中に発信していきたい」と、記事を作成して強く感じた。また、インタビューを行う上での傾聴力は必須である。キャリアカウンセラーになりたいという夢もあるため、それと繋げて考えながら今後もインタビューをしたいと感じた。
- この活動は、私の人生の経験としても、学習としてもとても大きな財産となった。自分でアポイントをかける時の下準備、インタビュー、インタビュー後の記事の作成。全てがそれぞれ試行錯誤ばかりの連続でとても大変だった。しかし、この経験を経て私は「可能性を狭めてはいけない事」と「インタビュー」の面白さと大切さを改めて学んだ。
- 今後、私も（取材した団体の活動の）お手伝いとして、この活動に関わり続けるつもりだ。その中で私自身、インタビューを通して教わった、人との関わり方のコツを実践していきたいと思っている。

◆ウェブサイトに掲載された記事一覧

年度	記事タイトル	インタビュイー
2021	おせっかいの輪を広げる	佐藤法子さん・嶋田朝子さん・藤岡邦子さん・藤野令子さん（NPO法人こあら村スタッフ）
	夢と個性を「つくる」音楽	水野蒼生さん（指揮者／クラシカルDJ／アーティスト）
	着物はファッション	シーラ・クリフさん（着物研究家）
	アートを通してつながる世界 〜 Kids helping Kids 〜	鳥居晴美さん（子供地球基金代表）
2020	「日本に来てよかった」そう思えるように	菊野英央さん（株式会社ジャフプラザ営業本部長）
	やさしい日本語でつなぐ外国人との絆	黒田友子さん（日本語教師・一般社団法人やさしいコミュニケーション協会代表）
	まずは来てみて！	田辺俊介さん、田村久教さん（NPO法人 西東京市多文化共生センター 理事）
	みんなを支える留学生会	キム・スジンさん（法政大学「韓国人留学生会」副会長）

◆課題

学生たちがグループ・チュートリアルや最終報告書において難しかった、大変だったと述べていた主な点は以下のとおりです。

- 漠然としたテーマを具体的に取材可能な形に絞り込むこと
- コネクションのない相手（社会人）から取材許可をもらうこと
- インタビュイーとのラポール形成（話しやすい関係の構築）
- インタビュー中の臨機応変な対応力（対話の中から深掘りすべき点を見つける力）
- 文字化にかかる労力
- 締め切りまでに作業を完了させるスケジュール管理力／自己管理力
- 記事を書く力、推敲力（読者を想定して書く力）

教員は、チュートリアル、学生の週報などを通じて、個々の学生の進捗状況を把握し、サポートが必要な学生にはアドバイスをしていくことが望ましいのですが、このクラスでは多様なプロジェクトが並行して行われていることから、教員が学生の個別の状況を把握する余裕がないときもあります。もちろん学生には何か困ったことがあればいつでも連絡するように伝えてはいますが、中には悩んだまま、取材が進まず、記事を完成できない学生もいます。そのため、定期的な声掛けと見守り、学生間での支え合いの仕組みをさらに作っていければと思っています。

参考文献

村田晶子編（2018）『大学における多文化体験学習への挑戦―国内と海外を結ぶ体験的学びの可視化を支援する』ナカニシヤ出版

村田晶子編（2022）『オンライン国際交流と協働学習―多文化共生のために』くろしお出版

村田晶子・箕曲在弘・佐藤慎司編（2022）『フィールドワークの学び方―国際学生との協働からオンライン調査まで』ナカニシヤ出版

おわりに

この報告書の作成にとりかかった2020年はじめに、新型コロナウイルスが世界中に広がりました。日本でも3月に緊急事態宣言が発出され、学校が休校になるなど、私たちの日常は一変しました。緊急事態宣言解除後も、多くの大学ではオンライン授業が続きました。そのようななか、2020年度の「ときめき取材記」プロジェクトは、これまでに積み上げてきたノウハウをもとに変更を加えながら、インタビューをオンラインに切り替えて行われました。オンラインの利点を生かし、海外に暮らす人たちへのインタビューを行ったり、大学を身近に感じ学ぶ意味を考える機会にしてもらおうと大学教員やOBOGに話を聞くことにしたり、とさまざまな工夫がされました。

対面を基本とするインタビューをオンラインで行うことには、正直なところ心配と不安がありました。対面することで共有できる空気、表情や仕草から伝わるメッセージ、いわゆる非言語コミュニケーションもインタビューでは重要な要素だからです。「人生の大先輩に対して質問できるか不安でいっぱいでした」とインタビュー前の緊張を吐露した学生もいました。しかし、インタビュイーの方々が丁寧に回答してくださったことで、次第に学生の緊張も解け、回答から質問をつくり、〈対話〉がうまれたことが、インタビューを終えた学生の感想や作成した記事から伝わってきました。

インタビューでは変化する〈現在〉が写し込まれるだけでなく、〈過去〉に作られた記事も〈現在〉とつながっています。ニュージーランド・カンタベリー大学のグループが行ったラーメン店経営者のインタビューには、コロナ禍で医療従事者に食事を届けるために考案した「DIYラーメン」のエピソードが出てきます。また、新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、マスクへの注目が集まっていたとき、ときめき取材記ウェブサイトに過去に掲載されたマスクの記事にアクセスが急増し、海外のマスコミからも取材の問い合わせがTJFにありました。ときめき取材記ウェブサイトは社会とつながった場であり、学生と社会をつなぐ場であることを再認識することになりました。まさに三代氏が指摘しているように、ときめき取材記は「ひととひと、ひとと社会をつなぐ」ものとなっているのです。

本報告書で紹介できなかった実践がまだまだ多くありますが、記事はときめき取材記ウェブサイトに蓄積されています。記事をご高覧いただき、さまざまな方たちの語りに耳を傾けていただけましたら幸いです。そして本書がきっかけとなり、若い人たちが、人と向き合い、対話する場が生まれることを願っています。

公益財団法人国際文化フォーラム

増補版あとがき

2021年4月に発行した本書初版に、このたび新たに実践2例を加えた増補版が完成しました。1例は秋田大学の日本語の授業、もう1例は法政大学の多文化教育の授業で行われたものです。

秋田大学では、もともと留学生が地元の方たちに「聞き書き」を行い、それをWeb雑誌として作成するほか、印刷したものを地元のお店に置いてもらうという地元密着の授業が実施されていました。「ときめき取材記」がめざすものと通じるところがあったことから、濵田氏は、TJFが主催する勉強会などにも参加し、希望する学生が「ときめき取材記」ウェブサイトに掲載できる道筋をつくってくれました。

法政大学では、いくつかの外部主催のプロジェクトの中から学生が選んで参加するという授業が行われていたなか、実践報告にもあるようにコロナ禍がきっかけとなり、本プロジェクトが選択肢の一つとして授業に組み込まれました。

こうした多様な取り組みが出てくるのも「ときめき取材記」プロジェクト（以下、ときめきプロジェクト）の特長ではないかと思います。ときめきプロジェクトは、かっちりとした決まった手順があるのではなく、ゆるやかなフレームであり、教師の方々がご自分の現場にあわせて取り入れていけるものになっています。「ときめき取材記」ウェブサイトへの掲載にはいくつかの条件がありますが、たとえ掲載に至らなくても、そこまでの過程で学生は大きな学びを得ているに違いありません。

ときめきプロジェクトで活用している「聞き書き」では、自分の評価や判断をいったん脇に置き、相手のことばを受け止め、相手の話を深く聴くことになります。そして、聞いたことを書くときに、相手の立場に立つことを体験します。こうした経験を通して得られる力は、他者と対話をする上での基本的な力であり、多様な人たちがともに生きていく社会を構成するために私たち一人ひとりに必要な力ではないでしょうか。

今後も多くの方に、「ときめき取材記」ウェブサイトをプラットホームとして活用していただくことを願っております。

公益財団法人国際文化フォーラム

資料

資料① 企画書フォーマット（TJF）

企画書（　　/　　に提出してください）

「ときめき取材記」企画名前：

テーマタイトル

テーマの概要・ねらい

なぜこのテーマにしたのか

取り上げる人候補（最低３名）と理由

その他アピールポイントなど

資料② 依頼文サンプル（矢部）

- それぞれの状況に合わせて、どのような書き方が適切かを考え、ことばを加えたり、変えたりしてください。
- 依頼状を出す前に、担当教員に文面を見せて、確認をとってください。

〇〇〇〇様

はじめまして。私は〇〇大学〇〇学部〇年の〇〇〇〇と申します。〇〇からの留学生です。

私が〇〇大学で履修している日本語科目「〇〇〇〇〇〇」では、「ときめき神奈川〜留学生が気になるあの人にインタビュー」というプロジェクトを進めています。このプロジェクトでは、自分たちが学び生活する場所である〈横浜〉を含む〈神奈川〉という地域での暮らしや活動にかかわるテーマについて、じっくり話を聞きたい人物を選び、インタビューを行い、記事を執筆することになっています。
私は、このプロジェクトにおいて、「　　」をテーマに記事を執筆したいと考えております。そこで、〇〇様に取材させていただきたく、お願いする次第です。

【何について話してもらいたいのかを、わかりやすく書いてください】

インタビューは約1時間をお願いしたいと思います。そのほかに写真の撮影もお願いしたいと思っています。〇月〇〇日〜〇月〇〇日の間でご検討いただけないでしょうか。
お忙しいところ申し訳ありませんが、インタビューを引き受けていただけるかどうかを〇月〇日までにメールでご連絡いただければ有難く、お願い申し上げます。またお引き受けいただける場合は、ご都合のいい日時を複数挙げていただけると幸いです。

なお、執筆した記事は、「〇〇〇〇〇〇」の授業において受講学生・担当教員と共有させていただきます。
また、このプロジェクトは、公益財団法人国際文化フォーラム（TJF）の協力を得て進められており、留学生が執筆した記事のうち選考に通ったものは、この財団が運営するウェブサイト「ときめき取材記」（https://www.tjf.or.jp/tokimeki/）に掲載される可能性があります。
TJF は、1987 年の設立以来、外国語教育や国際交流の分野でさまざまな事業に取り組んでいる民間の公益財団です。TJF は、「人を通して文化を見る」「個人の中の文化を見る」「文化の多様性を見る」ことに着目して日本情報の発信を行っています。
記事が完成した段階で、〇〇様にご確認いただき、ご相談の上ご承諾をいただけた場合は、サイトへの投稿をさせていただきたいと思っております。

貴重なお時間をいただき恐縮ですが、どうかご一考くださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

インタビュー／記事執筆担当者　連絡先：
〇〇大学　〇〇学部〇年　〇〇〇〇〇（名前）　E-mail:

担当教員　連絡先：
〇〇大学　〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇　E-mail:

資料③ プロジェクト進行表（矢部）

グループ名：　　担当者名〔　　〕

テーマ：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　インタビューイー：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

「ときめき神奈川〜留学生が気になるあの人にインタビュー」プロジェクト 進行表 ver.4（2020春）

		完了予定日	完了日	メモ
1	□ 企画書とインタビュー依頼文案を作成し、担当教員の承認を得る。			
2	□ 依頼文をインタビューイー（インタビューをお願いしたい相手）に送る。 ＊状況によって、先に、直接会って打診（インタビューをお願いできそうかきいてみること）をした上で、あとから、正式に依頼文を送る形でもよい。			
3	□相手の返信を受け取る。 ＊インタビュー可（OK）の返事→「4」へ。 ＊インタビュー不可（NG）の返事→別のインタビューイーで「1」へ。			
4	□インタビューの日時と場所を決定・確認する。写真を撮らせてもらうことをリマインドしておく。			
5	□インタビューの準備をする。 ＊インタビューの相手の活動などについて、よく調べて、情報メモを作成する（自分用）。 ＊インタビューでの質問をよく考える（聴きたいこと）。質問リストを作成する（自分用＋相手用）。 ＊録音機器（ICレコーダー、スマホなど）を準備する。事前に動作確認と録音の練習を必ず一度は行っておく。			
6	□インタビューを行う。 ＊録音のための機器を忘れずに。充電確認をし、予備の電源も持参する。直前にもう一度動作チェックをしておく。 ＊心を込めてあいさつをする。 ＊依頼文を見せて一緒に主要な部分を見ながら、インタビューの趣旨を、改めて確認する。 ＊自分と相手の連絡先を確認する。 ＊インタビューの内容をクラスで共有することを再度説明し、了解をとっておく。 ＊録音の許可をとる。「取扱に十分注意し、記事執筆担当者（＋担当教員）以外は録音を聞かない」「データーのコピーや、インターネット上へのアップロードは絶対に行わない」ということを約束する。 ＊インタビューでは、相手の話を聞きながら、さらに話を引き出す質問を工夫する。 ＊インタビューが終わったら、心をこめて、感謝と、感想を伝える。 ＊記事が書けたら、お送りするので、チェックしていただくことをお願いする（＿＿月＿＿＿日〜＿日頃の予定）。			

7	□インタビュー後、御礼のメールを書いて送る（できるだけ早く。インタビュー後2日以内に）。			
8	□インタビュー後、記憶が鮮明なうちに、インタビューをした内容をふりかえって、概略のメモを作る ＊どのような話をしたか。その中で、特にどのような話が印象的だったか。			
9	□録音データーを一回通して聴く。メモと照らし合わせながら、全体を確認する。			
10	□録音データーの中で、特に重要な部分を文字化する（あとで文字化したwordファイルを担当教員にメールで提出→＃14）。			
11	□文字化したデーターやメモを見ながら、記事の構成を考える。			
12	□文字化したデーターを使って記事を書く（相手が言っていないことを勝手に加えて書かないこと！）。			
13	□インタビューについて、クラスで報告する。 ①テーマ／インタビュイーの概要／テーマとインタビュイー選定の理由／インタビュー日時と場所 ②インタビューの内容（全体でどのような話をしたかの概要＋特に印象的だった部分についての詳細） ③自分の感想			__月〜の 授業で行う
14	□記事の草稿を担当教員に提出する。録音の文字化ファイルも添付して提出する。			__月末頃まで __月__日まで
15	□記事を推敲する。			
16	□記事の原稿をインタビューイーの方に読んでもらい、内容を確認してもらう。ときめき取材記への応募の許可を得る（許可が得られない場合は、担当教員に相談する）。 ＊インタビューイーの方のフィードバックに基づき、記事の修正・調整を行い、修正原稿も再度確認していただく。			__月__日 ごろまで
17	□記事最終版の報告会			__/__予定
18	□TJFときめき取材記にインタビュー記事を投稿する（希望者のみ）。			

資料④ ワークシート：「ときめき取材記」の記事を読む（義永）

「ときめき取材記」の記事を読んで、考えましょう

1. あなたは、どの記事を読みましたか。読んだ記事のタイトルを書いてください。
（少なくとも三つの記事を読んでください）

2. その記事を選んだ（読もうと思った）理由はなんですか。

3. 読んだ記事の中で、どれが一番「良い記事だ」と思いましたか。

4. 3で選んだ記事を、良いと思った理由はなんですか。

5. 3で選んだ記事に、「改善した方がよい」と思うところはありますか。
あるとすれば、どんなところですか。

6. 自分たちの記事は、どういう工夫をすると面白い記事になると思いますか。

資料⑤ ワークシート：インタビューの準備（義永）

1. 情報収集
   a. 今、自分たちのグループのテーマについてわかっていること

   b. インタビューまでに確認が必要なこと

2. インタビューの質問案
   a. 今、わからないので、教えてもらいたいこと

   b. 今、（ある程度）わかっているが、本当にそうか確認したいこと

•全体の流れを考えて、尋ねる順序を（ある程度）決めておく
インタビューで大事なこと：その人に関心をもって「知りたい」と思うこと、誠実に接すること、時間をとってくださったことに感謝すること

3. インタビューまでに確認・準備が必要なこと
   a. メンバーの分担　※途中で交代してもOK
   〈対面の場合〉
   質問（メイン）：
   記録＆フォロー：
   写真＆フォロー：
   〈オンラインの場合〉
   質問（メイン）：
   記録＆フォロー：
   時間管理＆フォロー：
   （Zoomの場合は、40分の制限に注意）

   b. 日時、場所の確認（迷わない＆遅れないように！）
   オンラインの場合は、機材やネット接続状況の確認

   c. 相手の方のお名前、肩書き

   d. 持っていくもの
   ・パソコン（ICレコーダー、スマホ、カメラ：対面の場合）
   ・手土産
   ・質問のメモ
   ・他には…？

•なるべく細かく、具体的にシミュレーションしてみよう！
   ・インタビューは基本的に日本語で行うこと
   ・インタビュー終了後、インタビューの動画または音声ファイルを提出すること

4. インタビューが終わったら
   a. なるべく早めにメンバーで振り返る。
   ・印象的だった、面白かったところ
   ・意外、予想外だったところ

・ぜひ他の人に伝えたいところ
・聞くことができなかった、確認が必要なところ

b. 録音を聞いて文字化する（文字化：話したことを文字にして残すこと）。
・なるべく全てを文字化するのが望ましい。
・文字化の方法：録音を再生して、Wordなどに打ち込んでいく。
googleドキュメントで音声入力をする（ツール→音声入力を選択）。

c. 文字化したものを見ながら、どういう構成で記事をまとめるか考える。

5. インタビューをやってみよう
a. 3人のグループを作る（3回繰り返すので、全員が全ての役割を経験する）。
Aさん：インタビューする人
Bさん：インタビューされる人
Cさん：観察する人

b. インタビューのための質問を考える。

c. インタビューをやってみる（10分間）。

d. aからcを3回繰り返す。

e. インタビュアーとして考えたこと、インタビュイーとして考えたこと、観察者として考えたことをグループで話し合う。

【インタビューの質問案】

資料⑥ ワークシート：模擬インタビューの振り返り（義永）

インタビューを振り返って

1. インタビューをしてみて、気がついたことや考えたことを書いてください。

2. インタビューをされた時に、気がついたことや考えたことを書いてください。

3. インタビューを観察して、気がついたことや考えたことを書いてください。

4. 記事作成のためにグループでインタビューを実施する際に、どんなことに気をつけるといいと思いますか。

資料⑦ワークシート：プロジェクトの振り返り（義永）

インタビュー・記事作成を振り返って

名前：

1. グループの中で、あなたはどんな役割を果たしましたか。

2. 一連の活動を振り返って、よかった、面白かった、と思うところは何ですか。

3. 一連の活動を振り返って、大変だった、難しかった、と思うところは何ですか。

4. 以下の項目について、あなたは10点満点で何点をつけますか。理由（評価の根拠）も書いてください。

   a. よく準備して、インタビューの相手に失礼がないように、インタビューが実施できた。

   点／10点

   理由：

   b. 趣旨（日本文化の紹介）に合った記事が作成できた。

   点／10点

   理由：

   c. 読者の興味を引く記事が作成できた。

   点／10点

   理由：

   d. グループのメンバーと協力して活動できた。

   点／10点

   理由：

   e. グループの活動に貢献できた。

   点／10点

   理由：

5. この授業や、インタビュー・記事作成に関する感想やコメントを自由に書いてください。

執筆者一覧（五十音順）

上田安希子（うえだ あきこ）　京都教育大学
荻野雅由（おぎの まさよし）　カンタベリー大学
重信三和子（しげのぶ みわこ）　早稲田外語専門学校
三代純平（みよ じゅんぺい）　武蔵野美術大学
矢部まゆみ（やべ まゆみ）　横浜国立大学
義永美央子（よしなが みおこ）　大阪大学国際教育交流センター
濵田典子（はまだ のりこ）　秋田大学
村田晶子（むらた あきこ）　法政大学

「ときめき取材記」ウェブサイト
www.tjf.or.jp/tokimeki/

2021年4月1日 初版発行
2023年4月1日 増補版発行

発行　公益財団法人 国際文化フォーラム（TJF）
〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14 音羽YKビル3階
TEL: 03-5981-5226 FAX: 03-5981-5227
Email: forum@tjf.or.jp URL: www.tjf.or.jp

編集　株式会社ココ出版
デザイン・組版　伊藤悠

©2023 The Japan Forum

どきめき取材記